

「盤王大歌」

—旅する祖先—

廣田 律子

二〇〇九年十一月に万葉古代学研究所研究会に於いて「祭祀儀礼に見る旅—中国湖南ヤオ族の通過儀礼を事例として—」のテーマで発表させて頂いた。

ヤオ族の男性が経なければならぬとされる宗教職能者としての法名を得、また最高位の階級を得る通過儀礼の還家願儀礼及び度戒儀礼に見える旅の要素を取り上げた。通過儀礼には、翻刀山・過水槽・上刀山・過勅床・捧火磚の数回に及ぶ試練が伴い、受礼者によって陰界への旅が試みられる。さらに受礼者の願ほどきの為に紙銭を天に届ける「大運銭」という七言の詩讚系の歌が歌われ、天界への旅の行程が示される。儀礼を無事終え、最後に行なわれるお披露目のパレードに、遊郷は以前現実に行なわれていた旅同様、関所が設けられ儀礼に於いて交付された文書が確かめられる。このように儀礼に旅の要素がちりばめられているといえる。

『盤王大歌』は盤王への感謝を目的として還家願儀礼の、還盤王愿の唱盤王大歌において宗教職能者達によってフシを付け読誦される。宗教職能者の説明によれば、ヤオ族が渡海した時遭難し、盤王に救いを求め願を掛けたが、無事上陸できたので、盤王に感謝し願ほどきをする目的で盤王を祀り、盤王大歌を歌うとされる。

本講ではあらためて発表の内容をまとめるのではなく、儀礼の中で祖先神への感謝を表わして宗教職能者によって歌われるこの『盤王大歌』を資料として翻訳を行ない、紹介したく考える。なぜなら内容には、ヤオ族の祖先が積み上げてきた民族の旅が窺えるからである。祖先が移動を繰り返し経てきた経験がまとめられているからである。この『盤王大歌』は、湖南省藍山県の宗教職能者に所蔵されている手書きのテキストで、七言の上下句で一頁十二行七〇頁で構成されており、詩讚形の部分と散文の部分とから成る。以下に録文と翻訳を付す。録文文中の「●」は不明箇所。

人話娘村歌堂到	九州四馬置舡来(行)
山高也會磨刀修路	水深也會置舡来(行)
人話娘村歌堂到	四邊江甫轉遊遊(灣湾)
四邊江甫遊遊(灣湾)轉	思着歌堂州到州(山到山)
人話娘村歌堂到	郎在九州獨自頭(山)
獨自過山無同伴	金鷄拍翅仔心愁(因)
人話娘村歌堂到	郎小聽風聽成来(行)
聽風不得半句話	下水聽龍郎聽声(行)
人話娘村歌堂到	郎小得知自得来(行)
行過縣門千人見	無本合舡随路来(行)
人話娘村歌堂到	郎小聽風聽後來(行)
郎小听風又听成	聽着娘来郎也来(行)
人話娘村歌堂到	趕舡不到扶沙洲(灘)
得見沙洲會寒冷	思着歌堂双泪流(難)
人話娘村歌堂到	九州八卦置舡良(流)

第一置缸出貴地
人話娘村歌堂到
第二置缸出貴地
人話娘村歌堂到
第一置缸到貴地
人話娘村歌堂到
第一置缸到水步
人話娘村歌堂到
作小不會出遠路
人話娘村歌堂到
架得車良（流）車扇轉
人話娘村歌堂到
手拿酒盞方按坐
人話娘村歌堂到
共村姊妹開聲讀
起 聲 唱
共鳥起聲在樹尾
起 聲 唱
今夜何時歌便起
三百二人郎在小
坐得南行（●●）世席口
齊 入 席
手拈七寸銀刀子
隔 席 唱
莫放風吹過火死
論 娘 唱
郎也唱條定酒盞
日頭欲上欲不上
日頭出早拗松柏
日頭出早挨松柏
專上專下松柏樹
日頭出早高三丈
長長（得）見雲遮雲月
日頭出早娘担水
半筒煮飯娘爺吃
日頭出早娘担水
半筒煮飯娘爺吃
日頭出早娘担水
娘姐問郎因何事
問娘是晏不是晏

第二置缸出貴鄉（州）
郎村無馬置缸來（歸）
第二置缸出貴街（村）
郎村無馬置缸良（流）
第二置缸人貴州（鄉）
郎村無馬置缸齒（來）
第二置缸入貴村（街）
屋底撐缸水面遊（良）
金夜正行出遠州（鄉）
郎隨遙遠架車流（良）
車扇々娘人貴州（鄉）
踏上一階第二階（廳）
怕娘不念接郎來（情）
湖南江口插条牌（系）
書字不真郎自來（知）
一双黃鳥起聲齊（齒）
郎了起聲坐席齊（齒）
歌堂林裡起聲雲（齊（齒））
明日何時歌便齊（齒）
人人叫我自南行（傳）
鯉魚過街本担當（過成人傳郎在齒）
席頭帶尾冷愁愁（秋秋）
割斷歌詞滿席流（拋）
又隔二重燈火爐（烟）
衫袖連娘過席圖（連）
娘也条郎定四条（双）
娘也唱條定四猿（行）
松柏欲生欲不生
拗条松柏引路行
專下（上）專下松柏垂（江）
拗条松柏引路歸（双）
任高四丈着雲遮
不會得見月遮雲
半筒溝水半筒沙（油）
半筒洗面出蓮花（風流）
半筒清水半筒台（田）
半筒洗面出秀才（官人）
担到月斜不見歸（行）
步頭担水着龍圍（爭）
問妹是中（丁）不是中（丁）

是中（丁）報娘煮晏飯
問娘是晏不是晏
煮得是茶（更）●菓送
日 正 中
南蛇過海也難見
日 正 中
要娘共飯平冲（車）水
日 落 江
手把馬鞭々連了
日 落 西
打破一州成兩縣
黃蜂含口西
黃蜂含糖（泥）歸結聞
日 落 烏
打得鷓鴣籠裡蓋
日 落 西
人話鷓鴣不有屋
日頭過早不過早
千村萬村月不照
日頭過江就是夜
西牛有欄鷄有屋
日頭過江專是夜
●水好做連塘還
日頭過江專是夜
平地種葱細立葉
日頭過江專是夜
白紙過涼々過線
日頭過江專是夜
看娘便是洛江月
夜 深 闌
天光落日歌堂散
夜 深 闌
絲線綉鞋三重底
夜 深 深
照得細心（糸）帶絲線
夜 深 深
娘但開門把郎入
夜 深 深
郎今不圖炉子吃
夜 深 深

担水步頭等舊籠（情）
問妹是茶（更）不是茶（更）
屋背楊梅暗結花（生）
南蛇過海成交籠
好奴過路也難逢
要娘担傘過平冲（車）
衫領不齊衫袖籠（遮）
秀才騎馬過連唐（州）
連子紛紛發落唐（州）
鷓鴣無伴下江啼（底）
大姊（姐）落西妹落西（帝）
黃蜂過嶺口含糖（泥）
共娘作笑討成双（妻）
湖南江口打鷓鴣
日夜偷來心裡無
鷓鴣無伴隔江歸（底）
鷓有鴣屋在深泥（坑）
上留月影照郎村（鄉）
單照單身無我村（鄉）
沙牛屢屢下江行（歸）
郎小單身獨自行（歸）
屋背離根專是陰（涼）
水流不過你無心（鄉）
屋背離根專是陰
風吹離根細搖々
屋背離根專是陰
白涼過線細寅々
屋背離根專是陰（涼）
落了斜郎何處尋（鄉）
色麥主人燈火難（办）
慢々數還燈火難（办）
絲線綉鞋來討親（双）
踏來娘屋討成親（双）
把火入房照細心（絲）
斜娘裙脚細寅寅（微々）
脚底無鞋通到心（良）
無床貼地也甘心（慢商量）
把火夜行炉裡林
且圖蘆葉好遮身
把火夜行蕉裡林

郎今不圖蕉子吃
夜 深 深
郎今不圖漆子吃
夜 深 深
郎今不圖茶子吃
夜 深 深
班竹好做涼傘柄
夜 黃 昏
歸到門前偷出泪
夜 黃 昏
單開前門隱姐（妹）眼
黃昏十二時
歌卷裡頭有句話
黃昏十二時
勸奴無我商量討
黃昏十二時
入娘羅帳細声話
黃昏抽燈欄橋坐
勸奴便來對面話
黃昏抽燈欄橋坐
娘姐問郎因何事
黃昏騎馬過何巷
光處點燈暗處照
大星也上月也上
大星原來問北斗
天 上 星
四个台盤四个丁
天 上 星
大缸無脚行千里
天 上 星
白雲使人青雲裡
天 上 星
大星又問小星事
大 星 上
托得香爐烟欠水盃
月 亮 亮
牛仔吃田（秋）娘莫怨
月 亮 亮
担水小娘不便火
賣糖不得糖条飯

且圖蕉葉好遮身
把火夜行漆裡林
且圖漆賣得黃金
把火夜行茶里林
且圖茶活得黃金
把火夜行舟竹村
担來娘屋討成親
作笑不知姐鎖門（●）
不得鎖匙開姐門（离）
作笑不知姐鎖門
後門朗當望娘來（行）
手拿歌卷過娘离（門）
報娘眼睡意（莫） 闕离（門）
勸奴無我早商量（尋思）
莫說齊娘是共賜（時）
入娘羅帳改娘衣（衫）
含笑改娘身上衣（衫）
橋巷裡頭好續麻（糸）
莫能楊梅暗結花（枝）
見得七星便過江（天）
思量無事入心連（仔無双）
何巷不通轉个頭（身）
思量看娘心裡愁（意存心）
北斗也行月也行
北斗原來伴月行（歸）
打落台盤四个丁
四个橫頭四个丁
打落台盤四个丁
台盤四脚守空廳
無雲無雨白青淋（藏々）
夜裡出來看舊情（双）
小星在成托香炉（烟）
小星在後討双圖（連）
托香烟（炉）
久●托來郎意圖（連）
亮下大州牛吃（秋）
牛角做梳列六娘（人）
亮在大州担水娘（客賣糖）
頭挿銅釵引地涼
賣油不得炒油湯

月 亮 亮	亮下大州客賣油
大州賣油七分價	一月點燈双泪流
月亮何曾是白日	大水何曾浸巷頭（邊）
娘便抄頭郎看面	不會無我大家愁（連）
月亮光々光光托	過娘門下托門眉（樓）
千樓（眉）萬樓（眉）月不托	單托門前花一頭（枝）
水過屋背成珠子	腳踏鵝毛心裡灵（愁）
十五年間月正亮	月亮何曾協衆情（頭）

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。この地方に来る為に、九州に四匹の馬や船が用意される。

山が高くても刀を研いで道を開くことができ、川が深くても船を作って来ることができる。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。川辺の辺りをぶらぶら回ってみる。川辺の辺りをぶらぶら回ってみる。歌の祭りのことを思いながら、一州から一州、山から山へとやって来た。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。若者は一人で九州の広さの山に登る。仲間がなく、一人で山を越えようとしている。金色の鶏はバタバタと羽を叩いている。若者の心は寂しい。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。若者は噂を頼りにやって来た。

噂は、はっきりした話が半句もない。若者は川に入り竜の声を聞く。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。若者はこの消息を聞くと、自自行かすにおれない。

県門を通ると千人の人が見える。人の船に乗せて貰って一緒に行く。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。若者は噂を聞いてやって来る。

若者は風の便りを重ねて聞く。あの乙女が来ると聞くと若者も来る。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。急いで船を漕いだが、扶沙洲に着かない。

沙洲が見えれば寒くなるだろう。歌の祭りのことを思いながら、涙が込み上げてきた。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。九州で占いをした上に船を用意する。

第一、船を用意してあの尊い地方に行きたい。第二、船を用意してあの尊い郷に行きたい。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。若者の村には馬がなく、船を用意して行く。

第一、船を用意してあの尊い地方に行きたい。第二、船を用意してあの尊い村に行きたい。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。若者の村には馬がなく、船を用意して行く。

第一、船を用意して水歩に着き、第二、船を用意してあの尊い村に入りたい。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。家の下から船を漕ぎ出して、水面を浮かんで行く。

幼い頃から、遠いところへ行くことがなかった。この貴重な夜に遠い州に行く。

あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。若者は遠方へ行く車の流れについて行

く。

車に乗って、車輪がぐるぐる回る。車輪がぐるぐる回って、あの乙女のいる州に入る。
あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。第一の階段に上がってから、第二の階段に上がる。

手に杯を持って座ったばかり、若者はあの乙女が迎えてくれるかどうかを心配する。
あの乙女の村で歌の祭りが催されると人々は話している。湖南の川の口に札が挿してある。
村の姉妹達は声を上げて本を読んでいる。若者はその文字のはっきりしないところが分かった。
声を上げて歌う。二羽の黄鳥は声を上げて歌う。

ほかの鳥は木の先で声を出している。若者は席に座って声を出す。

声を上げて歌う。林の中で歌の祭りの歌が歌われる。

今夜何時歌が歌い始まるか。明日何時歌が歌い終わるか。

三百二人の中で若者は幼い。人々は私を呼んで南の方へ行く。

南の世席口というところに行くと、鯉が町を通るように皆に注目される。

一斉に席に着く。第一の席から最後の席は、なんだか寂しいようだ。

手に七寸の銀の小刀を持って、歌詞を切って全ての席に流す。

席を隔てて歌う。さらに二重の灯火の炉を隔てる。

風が灯火を消すなかれ。あの乙女は仲間と袖を連ねて席に着く。

あの乙女は自分の番で歌い出す。あの乙女は若者には目を付ける。

若者も歌いながら杯を持つ。あの乙女も歌いながら若者に気が付く。

太陽は昇ろうとするが、昇りたくないように見える。松柏は生えようとするが、生えたくないように見える。

太陽は早く出て、松柏を照らす。松柏の枝を一本折って、道の印にして行く。

太陽は早く出て、松柏を照らす。上の方にも下の方にも松柏の枝が垂れる。

上の方にも下の方にも松柏の枝が垂れる。松柏の枝を一本折って、道の印にして帰る。

太陽は早く出て、三丈の高さに昇る。四丈に昇って雲に遮られる。

月が雲に遮られることはよく見るが、月が雲を遮ることは見たことがない。

太陽は早く出て、あの乙女は水を担ぐ。その桶の中に半分は溝の水で、半分は砂だ。

桶の水の半分でご飯を煮て、両親に食べさせる。桶の水の半分で洗った顔は蓮の花のように見える。

太陽は早く出て、あの乙女は水を担ぐ。桶の水の半分は清水で、半分は田にやる。

桶の水の半分でご飯を煮て、両親に食べさせる。桶の水の半分で顔を洗えば、秀才を出す。

太陽は早く出て、あの乙女は水を担ぐ。月が斜になるまで水を担いで、まだ帰らない。

あの乙女の姉は、何ごとで来たかと若者に聞く。歩頭で水を担ぐと、竜が争っているのが見えた。

晏（意味不明）であるかどうか、とあの乙女に聞く。中（意味不明）であるかどうか、と妹に聞く。

中であるならあの乙女に知らせて晏飯を煮させる。歩頭で水を担いで、古いつきあいを待つ。

晏（意味不明）であるかどうか、とあの乙女に聞く。お茶であるかどうか、と妹に聞く。

お茶なら、お菓子を送る。家の後ろの楊梅は密かに花を咲かす。

太陽はまさに天中になる。南蛇は海を渡ると竜になる。

南蛇が海を渡るとは滅多に見られない。良い人はこの道を通っても逢うことが難しい。

太陽はまさに天中になる。あの乙女は傘を持って平沖を通る。

あの乙女と一緒に平沖の水でご飯を煮て欲しい。着物はきちんと襟を正していない。

太陽は川に沈む。秀才は馬に乗って次々と唐州を通る。

手に鞭を持ち連なる。連なって続々と唐州に落ちる。

太陽は西の方へ沈む。仲間のない鷓鴣は川に降りて鳴く。

一州を打ち壊して、二つの県にする。上の姉は西の方へ落ちると、妹も西の方へ落ちる。

黄蜂は口に何かを含んで西の方へ行く。黄蜂は口に飴を含んで嶺を越える。

黄蜂は飴を含んで帰る。妻になって貰えないかと冗談めかしてあの乙女にいう。

太陽は落ちる鳥、湖南の川口で鷓鴣を追う。

鷓鴣を籠の中へ追い込む。屋にも夜にも密かに来て心が落ち着かない。

太陽は西の方へ沈む。仲間のない鷓鴣は川を隔てて帰る。

鷓鴣は家がない、と人々は話している。鷓鴣の家は深い溝にある。

太陽は早過ぎるか、そうでないか。上に月の影がまだ留まって、若者の村を照らす。

月は千、万の村を照らさず、専ら若者の村を照らす。

太陽が川を越えると、夜になる。沙牛はしばしば川に降りて行く。

西牛は牛小屋があり、鶏は鶏小屋がある。若者は一人で帰って行く。

太陽が川を渡ると、真っ暗な夜になる。家の背後は全部陰だ。

川の水は池に繋がっている。水が流れて来ないなら、君に気持ちは通じない。

太陽が川を渡ると、真っ暗な夜になる。家の背後は全部陰だ。

平地に植えた葱の葉は細く立っている。風が吹いて来ると、細い葉はゆらゆらと揺れる。

太陽が川を渡ると、真っ暗な夜になる。家の背後は全部陰だ。

不明

太陽が川を渡ると、真っ暗な夜になる。家の背後は全部陰だ。

あの娘は川の上を照らす月のように美しいが、月が斜に沈めば、若者はどうやって彼女を捜すことができるか。

夜が更けた。色麦の主人はなかなか灯火を点けない。

太陽が沈むと歌祭は終わり、ゆっくり帰って、なかなか灯火を点けない。

夜が更けた。若者は絹の糸で刺繍した靴を履いて、縁組みを求める。

絹の糸で刺繍した靴は三層の底、そんな靴を履いて、あの娘の部屋に入ると縁組みを求めることができた。

夜が更けた。若者は松明を持って部屋に入って、細心の注意を払って辺りを照らす。

細心の注意を払って絹の糸まで照らした。あの娘のスカートのすそまで細かく照らす。

夜が更けた。若者は靴を履かずに入って行く。

あの娘が戸を開けて、若者を入れてさえくれれば、寝台がなく、地面に寝ることになっても若者は甘んじる。

夜が更けた。夜に松明を持って葦の林を通る。

若者は今、葦の実を食べることをせず、ただ葦の葉で体を覆うことを願う。

夜が更けた。夜に松明を持って芭蕉の林を通る。

今、若者は芭蕉の実を食べることをせず、芭蕉の葉で体を覆うことを願う。

夜が更けた。夜に松明を持って漆の林を通る。

今、若者は漆の実を食べることをせず、ただ、漆を売って黄金を得たい。

夜が更けた。夜に松明を持って茶の林を通る。

今、若者は茶の実を食べることをせず、ただ、お茶を売って黄金を得たい。

夜が更けた。夜に松明を持って班（？）竹の村を通る。

班竹は傘の柄を作ることができる。班竹を担いであの娘の家に行つて縁組みを求める。

夜が更けた。若者が嬉しく思いながら行くが、あの娘が戸に鍵を掛けたことを知らなかった。

その門前にこっそり行くが、鍵がないからあの娘の戸を開けることができない。

夜が更けた。嬉しく思いながら行つたのに、あの娘が戸に鍵を掛けたことを知らなかった。

前門は開いているが、あの娘からは若者が見えない。若者は裏門へまわつて、あの娘が来るのを待つ。

黄昏の十二時、手に歌の巻物を持って、あの娘の門前を通る。

歌の巻物にはこんな言葉がある。「娘は眠くても、戸を閉じないようにせよ」という。

黄昏の十二時、私（若者）のいない時に、あの娘はよく考えるように勤められる。

私のいない時にあの娘はよく相談するように勤められる。あの娘と（若者が）一緒にいることを他人に話さないように。

黄昏の十二時、若者はあの娘の薄絹の帳に入って、彼女の着物を脱がせてみる。

あの娘の薄絹の帳に入ってから、か細い声で話す。微笑んであの娘の着物を脱がす。

黄昏に灯火を消してベッドに座つて、ベッドの横で麻を紡ぐことができる。

若者はあの娘に、向かい合つて話してくれるように願う。楊梅が密かに花を孕んだのではないか。

黄昏に灯火を消してベッドに座つて、七星が川を渡るのが見える。

あの娘は若者に「どうしたの？」と聞くと、「なんでもない」と答える。

黄昏に馬に乗つて、どの町を通るか、通れない町なら、身をかかわす（意味不明）。

明るいところで灯火を点けて、暗いところを照らす。あの娘に会いたくて、胸を焦がす。

大きな星が昇つて、月も昇る。北斗が動いて、月も動く。

大きな星はもともと北斗に聞く（意味不明）。北斗はもともと月を伴つて動く。

天上の星、台の上に打ち落とすと、四つの丁（意味不明）になる。

四つの台に四つの丁。四の横頭（意味不明）に四つの丁。

天上の星、台の上に打ち落とすと四つの丁になる。

大きな船は足はないが、千里までも行ける。台には四つの足があるが、天の庁を守る。

天上の星、雲がなく、雨もなく、寂しい。

白い雲は青い雲に入って、夜に出て来て、昔のよしみ（意味不明）を思い出す。

天上の星、小星は手に香炉を捧げている。

大星は小星に何かを聞く。小星は後ろで二人の気持ちを求める。

大星は昇る。香炉を捧げる。

香炉を捧げて、水入れる碗がない。捧げて来た香炉は若者の気持ちを伝えている。

月が明るく、大地を照らして、牛が飼料を喰う。

牛の子が田の苗を喰うのを、あの娘が咎めないように。牛の角で作った櫛で、あの娘は髪を梳かすことができる。

月は明るい、大州で水を担ぐあの娘を照らす。

水を担ぐあの娘は灯火を点けず、頭に銅のかんざしを挿して、地面は涼しい（意味不明）。

飴を売る者は飴をご飯に掛けられず、油を売るものは油でお汁を作れない。

月が明るい。大州を照らして客は油を売る。

大州で七分の値段で油を売る。一ヶ月灯火を点けて、涙を流す。

月が昼に出て来ることはなく、大水が町を浸すこともない。

あの娘が顔を出せば、若者はじっと見つめる。私（若者）がいないと、皆心配する。

月は明るく照らして、あの娘の門下を通る。

月はどの建物にも頼まず、ただ門前の一の花に頼む。

水が家に流れて来れば、全部珠になり、足が鷺鳥の羽毛を踏んで気持ちがよい。

十五年の間で今の月が一番明るい、月は人々の気持ちを知ることがあろうか。

「第一紅紗曲」

一片烏雲四邊開主人請客望来来到官廳底

酒盞未曾開手把銀瓶斟老酒千勸萬勸勸客飲

飲了主人酒眼泪落飛梅

一片烏雲四邊開主人請客望客来客到官廳底酒

盞滿筵開手把銀瓶斟老酒千勸萬勸々客

飲飲得主人酒意得客人来

一片烏雲四邊少郎来客遠無人家霧露山頭遮

燕子入雲担燕子担泥入舊家舊子舊女舊好家

三尺紅羅錦且唱一条紅水砂

一片烏雲四邊雲騎馬着断綉羅衣綉得羅衣了

了馬祿羅為三尺黃良都會交要娘笑作濕羅

衣且問光郎樹路上逢花摘一枝

式片烏雲四边披撐缸過得濕羅衣濕得羅衣

●下馬祿羅為日夜撐缸水（面）輾輾面看水水汪

汪愿了爺娘意々了断肝腸

一片烏雲四边雲看官不請當闲人身着綠紗錦

洒々付泥塵有酒将来今夜飲流落貴客唱金

言唱得今言了曲了萬千年

一片烏雲四边雲看官不請當闲人身着綠紗

錦腰伏九条韋有酒将来今夜飲流落流落貴客

唱今言唱得今言了眼泪落紛々

二十八成生會思量入山砍柴養爺娘養得爺娘

老々了頭白根源々大哥叫兄々叫嫂大家抄順

養爺娘（了）養得爺娘老々了禮拜敬燒香

十八成生會過頭相邀賭起高樓起得高樓了

四边本子起修々手把衫被伏金龍人生一世要相逢

打破油根子曲子曲子来香

二十八成生正是顛手拿笛了闹喧天頭戴金銀

帕羅衫都是銀錢今年又逢人還愿中廳唱出

古今言本是流落子得見妹相連

二十八成生正當時買絲買羅綉衣綉得羅
 衣了入席唱歌詞今年又逢人還愿門相撲出
 富貴羅衣了姊妹齊々着々起様神恩
 二十八成生正郎●撐缸過海念成双去到娘房
 程脚踏上娘床聽到五更郎歸去郎今归去路蒙々
 又着人●拍手踏地大興旺
 二十八成生是痴撐缸過濕羅衣濕羅得羅衣
 了入房報娘知娘小有衫借一領着起着起笑（迷迷）
 二十八成生會思量單身無我愛行鄉行到娘鄉裡
 逢着一双娘歸家說報（娘爺）姐手裡無錢便空灘一双娘
 寅卯二年天大旱 格木出火巫（人）
 蕉水出来吹得火 水底青苔出火巫（人）
 寅卯二年天大旱 深山竹木断蕉枯
 到處深山無水路 河岸年田空得無
 寅卯二年天大旱 深山竹木断（尽）蕉枯（青）
 到處官倉粒（四）粒米 到處學堂無卷書（經）
 寅卯二年天大旱 苧麻根底出青烟（丈）
 苧麻出来錢文大 弍兩稱来感二●（分）
 寅卯二年天大旱 四角龍門出火烟（海）
 四角龍門無水路 早得黄龍走上天（申奉雷）
 寅卯二年天大旱 早得黄龍走上天（州）
 三百人夫来尋殺 殺得龍角向南江（州）
 寅卯二年天大旱 早得黄龍走上天
 三百人夫来尋殺 殺得龍角向上天
 寅卯二年天大旱 雷天把火半天行（遊）
 雷公把火半天轉 甲子回頭禾正牲

「第一紅紗曲」

一片の黒雲が広がっている。お客様を招いた主人は、お客様の到来を待つ。お客様が庁堂に来た時には、まだ杯にお酒を注がない。手に銀の瓶を持って老酒を注いで上げる。お召し上がり下さいと何回もお客様に勧める。主人のお酒を飲むと、涙が落ちる。

一片の黒雲が広がっている。お客様を招いた主人はお客様の到来を待つ。お客様が庁堂に来た時には、杯にお酒をいっぱい注いである。手に銀の瓶を持って、お召し上がり下さいと何回もお客様に勧める。主人のお酒を飲むと、お客様は嬉しくなる。

一片の黒い雲が広がっている。お客様は人のすみかもない遠いところから来る。霧が山の峰を遮っている。燕が雲を刺し貫いて飛んで行く。燕が泥をくわえて古い家に入る。なじみの若者、なじみの娘、なじみの家。三尺の赤の薄絹の錦、まず一枚の赤薄絹の歌を歌ってみよう。

一片の黒雲が広がっている。薄絹の着物に刺繍する為に馬に乗って来る。着物に刺繍ができ三尺になったら、あの娘に上げる。あの娘の嬉し涙が薄絹の着物を濡らす。光郎樹という木を探して、途中で花に逢えば、一本摘んで下さいという。

一片の黒雲が広がっている。船を漕いで海を渡っていると、水しぶきが薄絹の着物を濡らす。濡れた薄絹の着物を着ていると、あたかも馬から降りるような気がする。日夜船に乗って、水面を漂う。水を眺め、水が広々としている。両親が私を心配するお気持ちを思うと、はらわたがちぎれるほど悲しい。

一片の黒雲が広がっている。家の主人はつまらない者を招かず、お客様は、緑の薄絹の着物を着ている。長い着物は地面に垂れている。家のお酒を持ち出して、今夜それを飲む。来られたお客様は流行の歌を歌う。この歌は千年も万年も伝えられるような良い歌だ。

一片の黒雲が広がっている。家の主人はつまらない者を招かず、お客様は緑の錦の着物を着て、腰に九本の皮をさげる。家のお酒を持ち出して、今夜それを飲む。来られたお客様は流行の歌を歌う。この歌が終わると、涙がぼつりぼつりと落ちる。

二十八歳になって、よく物事を考える。山に入って、柴刈りをして両親を養う。両親の髪の毛が白くなるまで養って上げる。兄や兄嫁を呼んで、皆で両親に孝行する。両親が老いるまで養うと、拝礼して焼香する。

一（二）十八歳を過ぎてから、招いた友と賭をして、高い楼を建てる。高樓が建つと、周りも良く整った。手に美しい衣を持って金竜を伏す。人生は一世の間に縁のある人に逢うだろう。油根子（人名？）を打破して、一曲、一曲の歌を歌う。

二十八歳は、ちょうど山の峰に登ったような良い時期だ。手に笛を持って、やかましく騒がしい音をたてる。頭に金銀帽を被って、薄絹の着物も値段の高いものだ。今年は願ほどきをする年だ。もとは落ちぶれた若者だったが、今はあの娘に逢うことができた。

二十八歳はちょうど良い年だ。糸を買って薄絹の着物に刺繍した後に、席で歌を歌う。今年は願ほどきの年だ。薄絹の着物に富貴の模様を刺繍した。姉妹は同時にその着物を着る。それを着て、神様のご恩に感謝する。

二十八歳はちょうど良い年だ。船を漕いで海を渡ってから、二人は一緒になる。彼女の部屋に入って、彼女の寝台に踏み上がる。五更まで眠ってから、若者は帰って行く。若者の帰る道はぼんやりとしている。拍手したり、地面を踏んだりして、良い運命を祈る。

二十八歳はちょうど阿呆みたいな年だ。船を漕いで、薄絹の着物を濡らした。薄絹の着物が濡れたまま、部屋に入ってあの娘に知らせる。若い娘から借りた着物を着ると、にこにこ微笑む。二十八歳に物事をよく考えるようになった。よく一人で他郷に行ったりする。あの娘の郷里に行くと、二人の娘に逢った。家に帰ってこのことを両親に知らせた。手持ちにお金がなく、あの二人の娘に逢ってもしようがない。

寅卯二年にひどい旱魃に見舞われる。格木（意味不明）から火巫（意味不明）が出る。

蕉水（意味不明）が火を消して、水底の青い苔から火巫が出る。

寅卯二年にひどい旱魃の年となった。深山の竹や木が尽く枯れた。

深山の至るところで水の流れる道がなくなり、川の岸の田には何も生えない。

寅卯二年にひどい旱魃に見舞われる。深山の竹や木が尽く枯れた。

至るところの役所の倉で米が非常に少なくなって、至るところの学校で一冊の本もなくなった。

寅卯二年にひどい旱魃に見舞われた。苧麻の根本から青い煙が出て来た。

生えてきた苧麻はとても小さくて、秤に掛けると二分しかない。

寅卯二年にひどい旱魃に見舞われた。四角の龍門から火の煙が出る。

四角龍門に水の通れる道がなく、黄龍は天に昇ろうとする。

寅卯二年にひどい旱魃に見舞われた。黄竜は天に昇る。

三百の人間が黄竜を探して殺してやろうとすると、竜の角が南江に向かって行った。

寅卯二年にひどい旱魃に見舞われた。黄竜は天に昇る。

三百の人間が黄竜を探して殺してやろうとすると、黄竜は角を天に向けて逃げる。

寅卯二年にひどい旱魃に見舞われた。雷が火を引いて天上に昇る。

雷公は火を引いて、空でごろごろと回る。甲子の年になると、稲が生えてくる。

「見怪歌」

寅卯二年見怪路	一条生上二条来 (名)
一条生上引怪路	二条生下引怪来 (眠)
寅卯二年見大怪	伏太二年見怪多 (賢)
牯牛鹿馬全無角	黄毛鶏仔角メ我 (朝天)
寅卯二年見大怪	伏太二年見怪多 (賢)
牯牛鹿馬全無腸	黄毛鶏子腸三羅 (千)
寅卯二年猪出角	伏太二年鶏 (衆) 出牙 (麟)
莫怪歌詞相説報	籬根壁上出石花 (驚動閻浮世上人)
寅卯二年天地動	天子做書歸報京 (州)
師人焼香禮拜佛	道子焼香地下名 (求)
寅卯二年天地動	天子造書歸報京 (州)
師人焼香禮拜佛	黄秆借錢進上京 (州)
寅卯二年天樹倒	三百人夫立一条 (双)
瓦匠焼磚貼樹脚	秀才把筆便来僚 (壯)
寅卯二年天樹倒	三百人夫扶不劳 (輕)
三百人夫扶不起	仙人扶起半天高 (●)
天 暗 烏	便是日頭相打無 (名)
日頭相打争天國	夫妻相打為争夫 (情)
天 暗 烏	便是烏馬吞日頭 (賢)
烏馬吞日争天國	官人禮拜入深愁 (連)
北 邊 暗	人人説得北邊崩 (陰)
人説北邊不有我	應有邪眉讀細章 (經)
北 邊 暗	人人説得北邊烏
人説北邊不有我	應有紫微讀細書
北 邊 暗	人人説得北邊流 (崩)
天子得聞開口笑	玉女得聞便話流 (崩)
北 辺 暗	人人説得北邊陰 (崩)
天子殺性救父母	魯班殺子救爺人 (娘)
天上雷公有五個	地下江河無万流 (名)
寅卯二年洪水發	天子依還發上州 (京)
寅卯二年雷發令	伏太二年雷發顛 (郷)
十五年間洪水發	七十老婆生嫩顛 (郷)

寅卯二年雷發地	伏太二年雷落州（江）
上家有賢來收捉	黃秆造錢伏出油（一雙）
寅卯二年雷落地	伏太二年雷落江（田）
上家有賢來收捉	上家收捉穩禾倉（倉邊）
寅卯二年雷落地	伏太二年雷落江（頭）
上家有賢醜雷醉	龍兒申奏報雷娘（頭雷喉）
寅卯二年雷落地	伏太二年雷落田
上家有賢醜雷醉	龍兒申奏大羅天
寅卯二年雷落地	伏太二年雷落田
天上三朝暗層霧	霧進三朝雷上天
一雙燕子白才才（齋齋）	口裡含花放落地（來）
口裡含花放落地	放下籬根倒落栽（埋）
葫蘆瓜物大州出	大哥行往得歸栽（家）
葫蘆初生有七夜	未經三夜物頭開（開牙）
葫蘆瓜物大州出	大哥行往得歸家（居）
伏羲種瓜有七夜	未經三夜便開花（手扳離）
葫蘆瓜物大州出	大哥行往得歸藏（從）
伏羲種瓜有七夜	裡頭結子萬田雙（千）
葫蘆瓜物大州出	大哥行往得歸居（藏）
葫蘆初生金雞卵	未經三夜大葫蘆（大禾倉）
葫蘆熟	修剗禮頭有七分（千）
寅卯二年洪水潑	伏羲走入裡頭門（眠）
葫蘆初生有七話	修剗裡頭有七雙（名）
寅卯二年洪水發	葫蘆泡起半天堂（廷）
踏上天廷望天脚	望見天脚水天流（不難）
寅卯二年洪水發	洪水流來入貴州（灘）
洪水盡	七朝七夜蔭天堂（門）
仙人解袵來誠水	減得弍分心便寬（閑）
洪水盡	七天七夜蔭天堂（門）
今夜酉時減得半	明日卯時減得雙（分）
洪水盡	七天七夜蔭天廷（階）
水底龍王來放水	明日卯時聽水聲（到底干）
洪水盡	十二個日頭平上東（山）
十二個日頭平平上	三條赤脚四條紅（班）
洪水盡	十二個日頭平晒干（蕉）
十二個日頭平平晒	賭你有賢晒到干（蕉）
洪水盡	十二個日頭平晒枯（愁）
十二個日頭平平晒	賭你有賢晒到枯（愁）
三百貫錢買彈子	又添四百買彈頭（賢）
龍廣彈弓射明月	李廣彈弓射月頭（上天）

洪水盡	十二個日頭平上天(山)
龍廣彈弓射十個	上留兩個照凡人(間)
洪水書	仙人杼棍去巡天(郷)
仙人巡天到別國	天下金無一個人(娘)
洪水盡	仙人杼棍去巡天(郷)
仙人巡郷(天)到別國	得見烏龜攔路眠
	烏龜開口説無人
洪水盡	因殺天下萬田人(娘)
也有烏龜偷出報	應有三步正逢人(娘)
洪水盡	因殺天下万田郎(人)
也有烏龜偷出報	天下無人自甲双(合親)
洪水盡	仙人杼棍去巡(全)天
仙人巡天到別國	打破烏龜成两边
	麟甲烏龜月様圖
伏羲相甲未相甲	伏羲相甲未成親(双)
隔岸燒香(梳頭)隔岸拜	火烟(頭絲)相合正成親(双)
伏羲相甲未相合	伏羲相甲未成親(双)
隔岸種竹隔岸拜	竹尾相合正成親(双)
為婚了	七朝花朵上娘身(床)
生下血盆無万姓	空成花朵未成人(郎)
為婚了	七朝花朵上娘身(床)
生下血盆無人俵	無人分俵未成人(郎)
會分更會分	九州玉女把刀分(般)
分為三百六十姓	三百九州立縣門(民)
會分更會分	九州玉女把刀量(分)
發上青山成獨姓	發上洞頭百姓郷(村)
會分更會分	九州玉女把刀真(頭)
發上青山帶平記	發出洞頭帶記真(鉗)
會分更會分	九州玉女把刀真(量)
前世置有職人眼	後世置有横眼人(娘)

「見えた怪しいものの歌」

寅卯二年に怪しい道が見えた。一条は二条を生んだ。

一条は怪しいものを引く道を生んだ。二条は生まれてから怪しいものを引く。

寅卯二年にととも怪しいものが見えた。伏太二年に怪しいものが見える。

雌牛、鹿、馬は皆角がなく、黄毛の鶏の雛は角が天に向かっている。

寅卯二年にととも怪しいものが見えた。伏太二年に怪しいものが見える。

雌牛、鹿、馬は皆角がなく、黄毛の鶏は腸が三千の長さ。

寅卯二年に豚は角が生えた。伏太二年に鶏は歯が生える。

歌の言葉が伝えることを不思議に思わず、垣根の壁の上に石の花が咲く。浮世の人達をびっくり

させる。

寅卯二年に天地が動く。天子は文書を作らせて都に送らせる。

師人は焼香して仏様を礼拝し、道子は焼香して地下に名を求める。

寅卯二年に天地が動く。天子は文書を作らせて、都に送らせる。

師人は焼香して仏様を礼拝し、黄矜（人名？）はお金を借りて都に行く。

寅卯二年に天樹が倒れた。三百人がそれを起こそうとする。

左官は木の根元で煉瓦を焼く。秀才は筆を持って文章を書く。

寅卯二年に天樹が倒れた。三百人でもそれを起こせない。

三百人は起こせないが、仙人は天を突くほど高い木を起こした。

空が暗くなった。それは太陽が殴り合うせいだ。

太陽が殴り合うのは、天国を争う（意味不明）為だ。夫婦喧嘩は夫の情を争う為だ。

空が暗くなった。それは黒い馬が太陽を呑み込んだせいだ。

天国を争う為に黒い馬が太陽を呑み込んだ。官人は礼拝してよく思案をめぐらす。

北方は暗くなった。人々は北方が曇っているという。

人は北方には行きたくないという。邪眉（人名？）がそこでまじめに本を読んでいるはずだ。

北方は暗くなった。人々は北方が暗いという。

人は北方には行きたくないという。紫微がそこでまじめに本を読んでいるはずだ。

北方は暗くなった。人々は北方がだめなところだという。

天子が聞くと、口を開けて笑いだす。玉女が聞くと、すぐその話を伝え広げる。

北方は暗くなった。人々は皆北方が曇っているという。

天子は畜生を殺して父母を救う。魯班は両親を救う為に子を殺す。

天上の雷公は五人もいるが、地下の江河は一万にならない。

寅卯二年に洪水が起きた。天子は都に帰って行く。

寅卯二年に雷が命令を出す。伏太二年に雷は大暴れに暴れる。

十五年の間に洪水が出た。七十歳のお婆さんは子を産んだ。

寅卯二年に雷が地面に落ちる。伏太二年に雷が川に落ちる。

上の家の賢い者はそれを捕らえようとする。黄矜はお金を作って伏出油（意味不明）。

寅卯二年に雷が地面に落ちる。伏太二年に雷が川に落ちる。

上の家の賢い者はそれを捕らえようとする。上の家はそれを捕らえて倉の側に置く。

寅卯二年に雷が地面に落ちる。伏太二年に雷が川に落ちる。

上の家の賢い者はお酢で雷を浸ける。竜の子は雷の母に奏上する。

寅卯二年に雷が地面に落ちる。伏太二年に雷が田に落ちる。

上の家の賢い者はお酢で雷を浸ける。竜の子は大羅天に上奏する。

寅卯二年に雷が地面に落ちる。伏太二年に雷が田に落ちる。

天上の三日間朝には暗い霧がこもる。霧のこもった三日の朝に雷が天上に昇る。

一對の白っぽい燕が口にくわえている花を芝に落とす。

口に含んでいる花を地面に落とすと、垣根のもとに植えられる。

瓢箪のような瓜は大州の産物で、一番上の兄はそれを家にもって帰る。

瓢箪が生え出るのは七夜かかるはずだが、三夜も経たないうちに芽が出た。

瓢箪のような瓜は大州の産物で、一番上の兄は外出してから家に帰る。

伏羲が瓜を植えることは七夜かかるはずだが、三夜も経たないうちに花が咲いた。
瓢箪のような瓜は大州の産物だ。一番上の兄は外出してから家に帰る。
伏羲が瓜を植えるのは七夜かかるはずだが、瓜の中にたくさんの種がある。
瓢箪のような瓜は大州の産物だ。一番上の兄は外出してから家に帰る。
瓢箪は初めて金鶏の卵を生んだ。三夜も経たないうちに瓢箪は大きくなった。
瓢箪は成熟した。修剗礼頭（意味不明）が七分ある。
寅卯二年に洪水が出た。伏羲は裏門に入る。
瓢箪が生えたばかりの時に七つの物語がある。修剗礼頭（意味不明）が七対ある。
寅卯二年に洪水が出た。水に浸けられた瓢箪が高い空に浮き上がった。
天の庭に踏み上がって天の足が見える。天の足が見えて水が天に流れる。
寅卯二年に洪水が出た。洪水が貴州まで流れて行った。
洪水が尽きる。七朝七夜天堂は暗かった。
仙人は脱いだ着物で水を盛る。水が少なくなると気が晴れる。
洪水が尽きる。七日七夜天堂は暗かった。
今夜の酉の時刻に半分減る。明日卯の時刻に二倍ほど減る。
洪水が尽きる。七日七夜天の庭は暗かった。
水底の龍王は出て水を放つ。明日卯の時刻に水の音を聞く。
洪水が尽きる。十二個の太陽が山を照らす。
十二個の太陽がゆっくり上がる。三条（意味不明）は裸足で、四条（意味不明）が赤い。
洪水が尽きる。十二個の太陽が地面を干す。
十二個の太陽が地面を干す。地面がすっかり乾くことを賭ける。
洪水が尽きる。十二個の太陽が地面を干す。
十二個の太陽が地面を干す。地面のものを枯らすほど干す、と賭ける。
三百貫の銭で弾玉を買う。また四百貫を足して弾玉を買う。
竜広は弾弓で明月を射て、李広は弾弓で月天に向かって射る。
洪水が尽きる。十二個の太陽は天上に懸かる。
竜広は弾弓で十箇の太陽を射落として、空に残された二つの太陽が凡人を照らす。
洪水が尽きる。仙人は杖を突いて天上を巡遊する。
仙人は天上を巡遊して別の国に行く。天下には一人もいない。
洪水が尽きる。仙人は杖を突いて天上を巡遊する。
天上を巡遊する仙人は別の国に行く。亀が道で眠っているのが見えた。亀は人がいないという。
洪水が尽きる。天下の田を多く持つ人が殺された。
こっそりそんなことを報告する亀もある。三歩歩き出すと、人に会うはずだ。
洪水が尽きる。天下の田を多く持つ人が殺された。
こっそりそんなことを報告する亀もある。天下には自ら縁組みする人はいない。
洪水が尽きる。仙人は杖を突いて天上を巡遊する。
天上を巡遊する仙人は別の国に行く。亀を打ち二つに分ける。亀の甲は満月のように円い。
伏羲と相甲はまだ会わない。伏羲と相甲は縁組みにならない。
岸を隔てて焼香して、岸を隔てて拝礼する。火と煙は一緒になって縁組みになる。
伏羲と相甲はまだ会わない。伏羲と相甲は縁組みにならない。

岸を隔てて竹を植えて岸を隔てて拝礼する。竹の尾が会って、まさに縁組みになる。
縁組みになった。第七日の朝に花が娘の身に付けられた。
血盆が生まれたが、姓がない。空しく花になって、人間になれない。
縁組みになった。第七日の朝に花が娘の身に付けられた。
血盆が生まれたが世話をして貰う人はいない。世話をして貰う人がいないから人間になれない。
うまく分けることができる。玉女は刀で九州を分ける。
三百六十の姓に分ける。三百九州に県の門を建てる。
うまく分けることができる。玉女は刀で九州を量る。
青山に行かせられた者は瑤姓になる。洞頭に行かせられた者は農民の郷だ。
うまく分けることができる。玉女は刀をもって九州を守る。
青山に行かせられると、印が付けられる。洞頭に行かせられる者も印が付けられる。
うまく分けることができる。玉女は刀で九州を量る。
前世では職人の目だったが、後世では横目の人間になる。

「第二山逢閑曲」

廣州結子青羅結四辺人看人鎖深線鎖線絲鎖線
羅里細湾々便是日頭初出山遠看便是初生月近来看
是山頭雪桑深結子羅喇滿山是且唱三逢曲閑逢遠客
來黃巢養女多乖巧拿办串人鎖深鎖線羅喇細
湾々便是日頭初出山青羅頭巾攔眉過裙条羅
帶拈腰伏滿身装果里羅四官人正是黃巢是女人
黃巢養女能猛勇踏上馬背便刀使劔使刀鎗正是
黃巢入陣場黃巢打破亞兒寨十分入陣也是敗人
頭落地羅喇面向東無水流來（海）滿江將錢去羅買金
雞子買歸家裡般々有般々便々羅喇五更啼啼到
娘村成秀才娘村騎白馬琉璃瓦便羅利相公宅頭
頭戴大州紗縛絲將錢去買黃陽鷄買家裡
般般叫羅利勞不勞具問紅珠勞不勞紅絲不勞
打斷条断遠々飛上松柏樹千聲萬勸羅喇不思歸手
把空籠掛樹枝將錢去買沈香樹買歸家裡无少数
无沙无数羅喇佛前燒得沈香大路遙當初不
是當閑事世今差落松柏裡一条生上囉喇
二条枯●林望從圖一日飲酒二日醉三日不飲酒
是那酒前酒成羅喇敗人身酒盞多盃初怒人歸
家說数老人聽老人說句羅喇上間難手拿琵琶
馬上彈鯉魚立刀随水上隨●水埠者風浪捕魚生子羅喇
鯉魚●●是深塘黃尾魚交秋七月随籠去羅喇
列龍神州一对寒風水面流一双白馬真朝々請過娘門外（一人出看羅喇二人）
看好做風流把你看南安寺裡賤馬反無人人陣会人押郎今
入陣羅喇押相公無水流來滿海紅一双燕子飛南上飛來

飛去江華縣江華縣裡羅唸口含泥遠路飛來不敢啼
燕子結巢官廳裡主人有酒羅唸勸郎食便是一雙
燕子飛南上飛來飛去江華縣江華縣羅唸不思歸
白紙寫書歸報家黃紙路遠謝客到謝人好客羅
唸到郎村坐落機尾（頭）踩機尾緣開箱揀出雙盃盞
家中無酒羅唸真把空瓶斟謝客遠路行上方打刀（接）林
裡宿心々人話過路宿郎來宿夜羅唸好娘房着雙寒（一歸去聲傳得好嫩）
開揀出苧麻被差人送上客林裡客人宿夜羅唸着
霜寒歸去聲傳單溥鄉當初起尾仙人造三層裡外
羅唸起高樓一對金鷄在裡頭前門成門金水步金匙
銀筋羅唸使金盃正是洪爺祖基催出小不會到別
回中心一條江水羅唸二條沙眼泪流々落娘村成遠家
村娘村好住不好住娘村好住羅唸不思歸白紙寫書
報歸家生落娘村清水別席中飲酒羅唸看起眼便
●風過天天光早起郎歸去又定言語雙泪流留住
大家相同伴羅唸不思歸去又宁思你思量郎路遠
黃巢頭戴金●盃甲金盃金甲羅唸脚交良口裡含刀手
使鎗千兵萬馬去打寨九州十縣●是敗人頭落地落馬
聽聲正是黃巢●●名黃巢龍朝仙人造仙人造子羅唸（交把黃巢子上拋打破東京十二寨殺）
人無看羅唸血長流正是黃巢手●高黃巢騎上黑龍
馬路上馬背羅唸口含刀口裡含刀去殺人大喊三聲天地
動天宿地敗羅唸血淋々身殺盡江南人無落黃巢本
是真天子天生天子羅唸降凡間不得閑頭戴金盃
着金甲子拋龍劍羅唸進州庭進了州庭千萬年天順二
年黃巢反黃巢作反羅唸置刀鎗入買入得刀鎗入
陣場二月十五去打寨凌離二散羅唸斷肝腸殺盡
君民歸本鄉黃蜂結閨（門）楣下老偷吃羅唸二人看
思着黃蜂●結開門楣下老陀歸舖羅唸賣黃金
賣得黃金歸定親將錢去買青藤買歸家裡裝
娘嫁裝娘出嫁羅唸嫁人鄉嫁落人鄉不望歸嫁落
人鄉成人我手拿禾秆羅唸一帶掃人家正是人家親
房內裡花黃桑葉落門楣外前門家下羅唸嫩桑絲七月
含花正着時黃巢養女金花羅唸插蓮花有日風吹到
係家郎在湖南裙名伏夜眠不睡羅唸無衣遮郎正睡
寒冷無衣遮坐落機頭機尾傳手拿酒盃羅唸雙流眼
淚雙々羅唸淚雙流淚雙流落酒盃將錢去買詩官我買
歸家裡羅唸嫩桑絲七月開花正着時七月八月花落
邪風吹花却落四邊姊妹相邀齊手連有錢去買大州傘買
歸家裡外人看外人出看羅唸傘多絲姊妹相邀齊手
連今年又逢人買還願担來娘屋羅唸是流落細傘門門都

是花●錢去買大州笛買歸家裡好声気好声好氣羅利（氣愁々吹得嬌娥心裡愁）今
年又逢人還願同声吹出羅利是風流正是風流出遠鄉將
來出買大州帶買歸家裡外人看外人出看羅利好細係思
量買得難今年又逢人還願中應得出羅利断肝腸正是
風流出遠鄉將錢去買白涼扇買歸家裡好花朵好花好朵
買羅利好意●●●石榴花朵紅正月二三月人來橘去羅利
向空中姊妹相邀難得逢將錢去買長沙紙買歸家裡無沙
數●沙●看羅利上願章上得願章籠裡外今年又逢人
還願中應撲出羅利交把師父把師人鈎願頭

「第二山逢閑曲」

広州の結び目は青い絹糸で作ったものだ。周囲の人達は絹糸で結び目を作っているのを見る。絹糸で結び目を作る。細かく絹糸を結ぶ。羅里。太陽は山から昇るばかりだ。遠くから見れば、月が昇り始めたように見える。近くから見れば山の頂上の雪のようだ。絹糸で結び目を作る。羅唎。山の到る処で三逢曲が歌われている。暇な時に遠くから来た客人に会った。黄巢の養女はとても綺麗だ。他人を誘って絹糸の結び目を作る。羅唎。細かく作る。太陽は山から昇ったばかりだ。青い頭巾を眉の上まで被っている。スカートの上の絹の紐が腰を縛っている。身なりがきちんとしている。里羅。四人の役人。まさに黄巢と女の人がいる。黄巢の養女は勇猛な者だ。馬の背に跨ると、刀や剣を使える。刀や剣を使う。ちょうど黄巢は戦場に入った。黄巢は亜兒寨を攻め破った。随分陣地に入ったが、つい失敗した。人の頭が地面に落ちた。羅唎。東に向かう川にいっぱい流れて来る水がない。お金で鶏の雛を買う。それを持って家に帰ると、色々なものがある。色々なものがある。羅唎。五更に鳴く。あの娘の村まで鳥の鳴く声が聞こえると、秀才が現われる。あの娘の村で白馬に乗る。琉璃瓦の家。羅利。相公の家。大州の絹の頭巾を頭に被る。お金で黄陽鶏を買う。家に持って帰ると、グーグーと鳴く。羅利。鳴くか、鳴かないか。鳴くか、鳴かないか、と紅珠に聞く。紅珠が鳴かないから、木の枝を折る。あいつは遠く松柏の木の上に飛び上がった。何度声を掛けても帰らない。手に持っている空の籠を木の枝に掛ける。お金で沈香樹を買う。それを家に持って帰ると、全部植えることはできない。羅唎。仏様の前で焼く。その沈香を焼くと、遠い大道まで香りが漂って行く。初めに、それは大切にされたが、今の世間では松柏でも大切にされないようになった。一本目の道に松柏は生えた。羅唎。二本目の道に生えたものは枯れた。一日中酒を飲むと、二日間も酔う。三日目に酒を飲まなくても酔うようになる。酒を飲む前に、酒を飲んだ後にでたらめなことばかりする。人間は酒を多く飲めば、他人を怒らせる。家に帰って年寄りに話して聞かせる。年寄りはそのうことがだめだという。羅唎。馬の上で持っている琵琶を弾く。鯉は波について泳いで行く。風や波に乗って泳ぐ。魚を釣ってその卵を生ませる。羅唎。鯉は深い池に投げ込まれてから黄尾魚になる。秋の七月に竜について行く。羅唎。神州の竜は寒風に向かって水面を泳いで行く。二匹の白い馬は真っ白なものだ。毎朝それに乗って、あの娘の門の外を通ると、風流な者だと見られる。南安の寺に馬を預けておく。そこに誰もいない。若者は今そこに入った。羅唎。相公はそこに留まる。流れて来る水がないから、川は一面赤く見える。一对の燕が南の方へ飛んで行く。江華県で飛び回っている。燕は口に泥を銜えて江華県の中で飛ぶ。遠くから飛んで来て、敢えて鳴かない。燕は役所の中に巣を作った。主人の家には酒がある。羅唎。若者に食べ物を勧める。一对の燕が南の方へ飛んで行く。江華県で飛び回る。

羅唎。帰りたくない。白い紙で手紙を書いて家に知らせる。黄紙路というところから客人が来た。客人を迎える。羅唎。若者の村に着いた。腰掛けに座る。箱を開けて、杯や皿を出す。家に酒がない。羅唎。銚子を空にはいけない。酒を注いで、遠方へ行く客人に捧げるから。上の方で刀を作るなら、林の中で泊まる。人々は旅人が泊まることを話す。若者はここに来て泊まる。羅唎。娘の部屋は綺麗なところだ。箱から苧麻の布団を出してから、人を遣わして客人の泊まる場所に送る。客人はそこに泊まる。寒い頃になると、故郷に帰って行く。この建物は初めに仙人が建て始めたものだった。三階の建物だ。羅唎。高い建物を建てる。一对の金鶏はその中にある。前門や後門には、金の飾りがある。金の鍵、銀の箸。羅唎。金の杯。まさに祖先の洪爺の残したものだ。幼い頃から他のところに行くことはない。一筋の川がその中心にある。羅唎。砂もある。涙を流す。あの娘の村は遠いところにある。あの娘の村に泊まることができるかどうか。あの娘の村に泊まることできるなら、羅唎。帰りたくなる。白い紙で手紙を書いて家に出す。あの娘の村に泊まると、別れたくない。席に着いて酒を飲む。羅唎。みるみるうちに風が吹いて来た。夜が明けると若者は帰って行く。また話をしているうちに涙があふれて来た。留められた。一緒にいたいのだ。羅唎。帰ることを考えたくない。若者の行く道が遠いからと心配する。黄巢は金の鎧に身を固める。金の甲と金の鎧。羅唎。脚交良。口に刀をくわえて、手に槍を持っている。千軍万馬で砦を攻める。九州十県をも攻め破った。人の頭が地面に落ちる。馬から落ちる音が聞こえる。まさに黄巢だ。黄巢龍は仙人に拜し、仙人に達し子となる。黄巢の手から放たれた。東京の十二の砦が打ち破られた。多くの人は殺された。羅唎。長い間血が流れた。まさに黄巢のやりようはむごいものだ。黄巢は黒竜馬に乗る。羅唎。口に金刀をくわえる。口に金刀をくわえて人を殺す。大声で三回怒鳴ると、天地も震える。天が崩れ、地が震える。血みどろになる。江南の人々を殺し尽くすほどだった。黄巢は真の天子だ。生まれつきの天子だ。羅唎。俗世間に降りて来た。俗世間に降りてから休むことができない。頭に金の甲を被って、鎧に身を固める。手に竜剣を持っている。羅唎。州の役所に入る。州の役所に入ると、いつまでも保つ。天順二年に黄巢は反逆した。黄巢は反逆した。羅唎。刀や槍を整える。刀や槍を整えると戦場に入る。二月十五日に砦を攻める。何もかも破壊した。羅唎。肝腸も裂くほどだった。君王から人民まで殺し尽くした後に故郷に帰った。黄蜂が門の横木の下で飛び回る。年寄りは何かを盗み食う。羅唎。二人は見た。黄蜂の蜜かも知れない。門の横木の下で飛び回る。羅唎。黄金を売る。黄金を売って、家に帰ってから婚約する。お金を持って青藤の箱を買う。家に帰ってから、娘の嫁入り道具などを箱に入れる。嫁入りする。羅唎。他郷に嫁入りする。他郷に嫁入りすると、大人になった。手に箒を持って家の掃除をする。ちょうど、その家の部屋に花がある。黄色い桑の葉が門の横木の外に落ちる。家の前門の外に桑の新しい枝が出ている。七月にちょうど花が蕾を付けた。黄巢の養女は金の花のようだ。蓮の花を挿している。ある日、風がその家まで吹き込んだ。湖南にいる若者は夜によく眠れないだろう。羅唎。着物が足りない。今若者は寒さに耐えて眠っているだろう。起きてから腰掛けに座る。手に酒杯を持つ。羅唎。涙が溢れ出る。羅唎。流した涙が酒杯に落ちる。お金で詩官を買う。それを持って家に帰る。羅唎。桑の新しい枝。七月が花の咲く頃だ。七月、八月に花が落ちる。嫌な風に吹かれた花が周りに落ちる。姉妹は誘い合って、手に手を取って出かける。お金で大州の傘を買う。買った傘を持って家に帰ると、他人に見せる。他人はそれを見る。羅唎。傘の上に飾りがある。姉妹は誘い合って、手に手を取って出かける。今年はちょうど人々が願ほどきをする年となる。娘の部屋に集まる。羅唎。その傘に花模様がある。お金で大州の笛を買う。買った笛を持って家に帰る。あの綺麗な娘が感動するように笛を吹く。今年は

ちょうど人々が願ほどきをする年となる。音を合わせて吹く。羅利。風流なことだ。まさに風流だから遠い他郷に行く。お金で大州の帯を買う。買った帯を持って家に帰ってから、他人に見せる。他人は出て見る。羅利。ようやく手に入れたものだと思う。今年はちょうど人々が願ほどきをする年となる。買った大州の帯を締める。羅利。肝腸が裂けるほど悲しい。ちょうど風流な者は遠い他郷に出かける。お金を持って白涼扇を買う。買ったものを持って家に帰ると、綺麗な花が咲いている。綺麗な花だ。気持ちがよい。真っ赤な柘榴の花が咲いている。お正月から、二、三月まで他人は来て花を摘んで行く。羅利。姉妹は誘い合うのが有り難いことだ。お金を持って長沙紙を買う。それを持って家に帰ると、何枚か分からない。その枚数を数えてみる。羅利。願を掛ける文を捧げる。願を掛ける文を籠に入れるはずだ。今年はまた人々が願ほどきをする年となる。広間から出る。羅利。今度の願かけの文を師父に渡す。以前の願がほどかれた。

※羅里、羅唎、里羅一対字

戯曲などの歌詞で、口調を揃える為、またはメロディーに合わせる為に加えられる字。

第一平王造得地	第二平王造得天
第三竹王造得火	第四周王造得天
第一平王造得地	第二高王造得天
第三煖王造得手	第四平王造得衫
第一平王造得地	第二高王造得天
高王造天蓋不過	立轉地王蓋過天
第一平王造得地	第二高王造得天
高王造天蓋不過	龍王蓋過正團圓
何物量天不量地	何物量地不量天
何物量天天星宿	何物量地地中眠
七星量天不量地	田螺量地不量天
七星量天天星宿	田螺量地地中眠
地下量々無萬潤	天上量々無万高
莫怪歌詞相説報	烏龜背上は無毛
平地塞河成大海	如何得見月初生 (團圓)
日頭出世照天下	龍王出世榜何生 (从)
初造日頭十二個	出世日頭兩個陰 (無)
十個打落銅鑼國	两个有賢身帶金 (珠)
高王造天置天地	平王造地置地州 (庭)
置得日頭第寶一 (天子在高身落網)	又置七星 (明月在高) 第二名 (人)
高王造天置天地	赤王立地月初生 (園)
龍堆有賢倒榕樹	轉回番歸樹又生 (先)
高王造天更立地	赤王立地月初生先
龍堆有賢月裡坐	七星●道月邊行 (身邊)
高王造天更立地	赤王立地月初生 (元)
龍堆有賢月裡坐	低王無道月邊行 (身邊)

高王造天置天地	平王造地置青山（州）
置得青山（州）無万濶	又置江河無万湾（流）
高王造天置天地	平王造地置山源（苗）
置得山源（苗）向水口	又置水源無万源（条）
高王造天置天地	平王造地置田塘（平田）
置得田塘無万濶	人置早禾無萬倉（千）
高王造天置天地	平王造地置田塘（平田）
置得田塘（平田）凡人作	又置牯牛無万双（千）
高王造天置天地	平王造地置江河（江灘）
置得河（灘）無万濶	又置里魚（●人）無万多（双）
高王造天置天地	平王造地置江湖（河）
置得江湖（河）無万濶	又置客舡無万多（千）
天子造得千条路	劉三（魯班）置得萬条歌（象牙梳）
高王造天置天地	平王撲出做江心（灘）
水底龍王為学縣	龍王搏古到自今（塞水正如安）
高王造天置天地	平王造地置羅更
置得羅更巡天轉	又置龍舡水面行
高王造天置天地	平王造地置州平（廷）
置得州平（廷）相公坐	又置筆頭手裡行（龍）
高王造天置天地	平王造地置州門（廷）
置得州門（廷）相公坐	又置筆頭手裡行（龍）
高王造天置天地	平王造地置州廷（場）
置得州廷（場）相公坐	又置路衢通到京（郷）

第一、平王は地を造り上げた。第二、平王は天を造り上げた。

第三、竹王は火を造り上げた。第四、周王は天を造り上げた。

第一、平王は地を造り上げた。第二、高王は天を造り上げた。

第三、煖王は手を造り上げた。第四、平王は着物を造り上げた。

第一、平王は地を造り上げた。第二、高王は天を造り上げた。

高王の造り上げた天は覆うことができず、まもなく地王は天を覆うことができた。

第一、平王は地を造り上げた。第二、高王は天を造り上げた。

高王の造り上げた天は覆うことができず、竜王はうまく覆うことができる。

天を量るが地を量らないものは何か。地を量るが天を量らないものは何か。

何物が天上の星座を量り、何物が地下に眠っているものを量るか。

七星は天を量るが、地を量らない。田螺は地を量るが、天を量らない。

七星は天上の星座を量り、田螺は地下に眠っているものを量る。

地下を量ってみると、広さが一万にならず、天上を量ってみると、高さが一万にならない。

歌の言葉を怪しいと思わないで伝え合う、亀の背には毛がない。

平地に川の水が塞がって大海になる。どうすれば月の昇り始めを見ることができようか。

太陽は世に出て天下を照らす。竜王は世に出て、その印がどこにあるか。

初めて造られた太陽は十二個ある。世に出た太陽の二つが雲に遮られる。
 十箇が銅鑼国に打ち落とされる。二個は幸いに金が身に付けられた。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は地を造って、地に州を設置する。
 太陽を第一の宝として設置する。さらに第二の七星を設置する。
 天子は高いところにいて身落網（意味不明）、明月は高いところにいて第二名となる。
 高王は天を造って、天地を設置する。赤王は地を立てて、月が初めて出て来た。
 竜堆の賢い人は榕樹を倒した。帰って来ると榕樹が生き返った。
 高王は天を造ってから、さらに地を立てる。赤王は地を立てて、月が初めて出て来る。
 竜堆の賢い人は月の中に座る。七星の道は月の側を回る。
 高王は天を造って、さらに地を立てる。赤王は地を立てて、月が初めて出て来る。
 竜堆の賢い人は月の中に座る。低王は道がなく、月の側を歩く。
 高王は天を造ってから、天地を設置する。平王は地を造って青山を設置する。
 設置された青山の広さは万にならず、設置された江河の湾が万にならない。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は地を造って、山の源を設置する。
 設置された山の源は水口に向かって、さらに設置された水の源が万条にならない。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は地を造って、田や池を設置する。
 設置された田や池の広さは万にならず、人々に設置された早苗は万の倉を満たすことができない。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は地を造って、田や池を設置する。
 設置された田や池が凡人に耕される。さらに設置された雌牛は万にならない。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は地を造って、江河を設置する。
 設置された江河の広さは万にならず、さらに設置された鯉が万にならない。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は地を造って、江湖を設置する。
 設置された江湖の広さは万にならず、さらに設置された客船は万にならない。
 天子は千条の道を造り上げる。劉三は一万条の歌を作る。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は川の州を造り上げる。
 水底の竜王は為学泉（意味不明）、竜王は昔から今まで守ってきた。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は地を造って羅更（意味不明）を設置する。
 設置された羅更（意味不明）は天を回って巡遊する。さらに設置された竜船が水面を流れて行く。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は地を造って、州を設置する。
 設置された州の役所に役人が座っている。さらに設置された筆を手に持つ。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は地を造って、州の門を設置する。
 州の門が建てられると、役人がそこに座る。さらに造られた筆を手に持つ。
 高王は天を造って、天地を設置する。平王は地を造って、州の役所を設置する。
 設置された州の役所に役人が座る。さらに設置された大道が都に通ずる。

「又唱王打水」

開路深山過曲凹	龍王海底坐寬遊（生）
龍王水底寬由坐	望見日頭滿地流（行）
日頭獨祿是魚屋	黃沙細石是魚捕（兄）
蝦公自郎龍大舅	蝦婆是郎親大姑（兄）

白鵝灘頭吃白水
鰕公頭戴青置帽
水底光々魚吃冷
莫怪歌詞相說報
深山竹木劉王種
南安水底是龍較
深出竹木劉王種
珍珠糯米凡人寶
深山竹木劉王種
珍珠糯米凡人寶
深山竹木劉王種
珍珠糯米凡人寶
州廷花開聖人摘
深山竹木劉王種
河岸平田凡人作
深山竹木劉王種
聖人種德太陽木
白姑樹上叫鳥鳥（固固）
鯉魚也為麻姑（賢）死
洪爺出世着寶年
命着劉王改換成
洪爺出世無田地
抄頭望見龍為月
出世唐王先出世
唐王出世連州（村）廟
月光光々照下海
眼元報起攔胸照
月光光々照下海
眼王執起攔胸照
出世唐王先出世
抄頭望見龍為月
出世唐王先出世
上家燒香連州廟
信王出世先出世
無衣着
出世信王先出世
信王出世無衣着
出世盤王先出世
盤王出世福江（西天）廟
出世盤王先出世

鯉魚水底吃黃沙（枝）
鷄公頭戴石榴花（棗）
水底光々魚吃因（苔）
便是金花石上
深塘曲凹是龍開（台）
水底龍門日夜（後後）開
港邊楊柳聖人栽（連）
佛前書卷僧家開（遍）
港邊楊柳聖人爭（連）
香爐水盃僧家行（遍）
港邊柳楊聖人連（爭）
香爐水盃僧家添
四門八路聖人栽（及）
井邊榕樹聖人栽（久）
牯牛鹿馬聖人栽（从）
井邊榕樹聖人連（爭）
拋上太陽隨月行（千万年）
鯉魚着釣為麻姑（賢）
因為當初到讀經（書）
命着劉王改換堂（天）
世代兒孫接少郎（年）
葫蘆生子未為真（成）
不見唐王現出身（廳）
唐王世在出連州（村）
手把金牌双泪流（月樣圖）
照見唐王書案頭（流）
書世愁（州）
照見唐王書案中（連）
出世龍（邊）
唐王出世未為真（情）
不見唐王現出身（廳）
唐王出世百般齊（陰）
得見唐王坐廟台（心）
信王出世不有娘人
路逢金骨拗遮涼（身）
信王出世不遮蔽（秋）
路逢金骨拗遮床（羞）
盤王出世在福江（西天）
帽戴哨朝上江（天）
盤王出世在福江（西天）

盤王出世福江（西天）廟	兩個金童在兩行（邊）
相賭盤王愛相賭	釈迦相賭在江河（邊）
盤王坐得三年半	釈迦背上生田螺（蓮花）
高台望見齊眉鏡	龍王花粉在洪州（村）
盤生原生一對女	式年四季出行遊（村）
玉女梳頭不乱髮	聖女梳頭髮乱飛（系）
是佛樣	連着唐王双下歸（不了時）
要娘買笠娘不買	要娘買傘說無久（油）
得娘實已成郎我	苧葉遮頭也過年（秋）
白涼扇	反復兩邊都是花（金）
得娘是已成郎我	反復兩邊都是甲（親）
担傘共担傘	要娘担傘細傘開（陰）
要娘共担花油傘	誰知傘底有官人（秀才）
担傘出門傘得傘	搖扇出門風（前）對風（前）
担傘出門風打破	空担傘骨捧門逢（前）
担傘過橋來照影	橋高水底影無真（良）
解衫踏上橋頭上	生死要連橋底人（娘）
担傘協々郎出急	担傘担桑郎去江（親）
担傘莫担舊人傘	有我莫連人舊双（親）
担傘協々郎去急	担傘遊々郎去州（親）
娘小去州郎去縣	縣門相等討成双（親）

「また王様が水を汲むことを唱う」

曲がった窪を通して深山で道を聞く。竜王は海底で広い座席に座っている。

竜王は水底で広い座席に座って、太陽が地面を遍く回っているのが見える。

太陽が特に照らすのは、魚の棲むところで、黄色い砂や細かい石で魚を捕らえるところだ。

蝦公が若者の竜舅父さんで、蝦婆が若者の伯母さんだ。

白鳩が砂浜で水を飲む、鯉が水底で黄色い砂を食う。

蝦公が青い帽子を頭に被り、雄鶏が柘榴の花を頭に被っている。

水底が明るく、魚が冷たい水を飲み、魚が明るい水底で苔を食う。

歌の言葉を怪しいと思わないで伝え合う、金花が石の上で咲いた。

深山の竹や木は劉王の植えたもので、深い池や窪んだ田は竜の開いたものだ。

南安の水底は竜の住んでいるところで、水底の竜門が日夜開いている。

深山の竹や木は劉王の植えたもので、港の辺りの柳は聖人の植えたものだ。

珍珠のような糯米が凡人の宝で、仏の前の書物が僧の開けるものだ。

深山の竹や木は劉王の植えたもので、港の辺りの柳は聖人の植えたものだ。

珍珠のような糯米が凡人の宝で、香炉や水鉢は僧の持つものだ。

深山の竹や木は劉王の植えたもので、港の辺りの柳は聖人の植えたものだ。

珍珠のような糯米が凡人の宝で、香炉や水鉢が僧の持つものだ。

州の役所に咲いた花は聖人に摘まれる。四つの門や八筋の道は聖人が開いたものだ。

深山の竹や木は劉王の植えたもので、井の辺りの榕樹は聖人が植えたものだ。
川岸の田は凡人に耕されるもので、雌牛や鹿馬は聖人に飼われるものだ。
深山の竹や木は劉王の植えたもので、井の辺りの榕樹は聖人の植えたものだ。
聖人は太陽の木を植えて、放たれた太陽は月について回る。
白姑が木の上でウーウーと鳴き、鯉が鉤に釣られたのは麻姑のせいだ。
鯉が麻姑のせいで死ぬ、もともと読経したせいだ。
宝の年に洪爺が誕生した。劉王に命じて天下を換える。
劉王が天下を換えるように命じられた。若い子孫が世代交替してきた。
洪爺は誕生してから田地を持たず、瓢箪から生まれたとは本当のことではないかも知れない。
頭をもたげて、竜が月になったのを見つけた。唐王が姿を現わすのは見えず。
誕生した唐王は早産の子だった。唐王の誕生したところは連州だ。
唐王は連州のお寺で誕生して、手に持つ金の牌が月のように円い。
明るい月が下の海を照らして、唐王の机の上をも照らす。
眼王は月の光をもって下の方を照らして、唐王の机をも照らす。
明るい月が下の海を照らして、唐王の机を照らす。
眼王は月の光をもって下の方を照らして、誕生した竜のような唐王を照らす。
誕生した唐王は早産の子だ。唐王の誕生が本当かどうか。
頭をもたげて竜が月となったのを見つけたが、唐王が姿を現わすのは見えず。
誕生した唐王は早産の子だ。唐王は誕生し全てのものが整っている。
上の家は連州のお寺で焼香して、唐王はお寺の台に座っている。
誕生した信王は早産の子で、信王の誕生する時に母が亡くなる。
信王は誕生するが、着物がなく、道で会った金骨で体を覆う。
誕生した信王は早産の子だ。信王は誕生した時に体を覆うものがなかった。
信王は誕生した時に着物がなく、道で会った金骨で体を覆う。
誕生した盤王は早産の子だ。盤王は福江で誕生した。
盤王は福江のお寺で誕生した。頭に高い帽子を被っていた。
誕生した盤王は早産の子だ。盤王が福江で誕生した。
盤王は福江のお寺で誕生した。二人の金童が両側に控えている。
賭をする盤王は他人と賭をやるのが好きで、川辺で釈迦と賭をする。
盤王は三年半その位に座る。蓮の花が釈迦の背中に生えた。
高い台から齋眉鏡が見える。竜王の花粉が洪州にある。
盤王はもともと二人の娘を育てた。彼女たちは一年四季に外出して遊ぶ。
玉女は髪をきちんと梳く。聖女は髪を梳く時に髪がぼうぼうとなる。
玉女は髪を梳くと、仏様のようになる。唐王と一緒に帰る。
あの娘に傘を買うように勧めたが、彼女は買わない。あの娘に傘を買うように勧めたが、お金がないという。
あの娘が私に近付いて、私が彼女の夫になることができたら、麻の葉で頭を覆ってもよい年を過ごす。
涼しむ為の白い扇は表裏とも花模様がある。
あの娘が私に近付いて、私が夫になれば、表裏とも親しくなる。

傘を担いで一緒に傘を担ぐ。あの娘に傘を担いで貰うと、細い傘が開いた。
 あの娘に花模様のある傘を担いで貰えば、傘の下に秀才がいることを誰が知ろうか。
 傘を担いで出かけると、また傘を得る。扇で仰ぎながら出かけると、風が風と出会う。
 傘を担いで出かけると、傘が風に破られて、空しく傘の骨を担いで門前に着いた。
 傘を担いで橋を渡る時に自分の影を見ると、橋が高いので水底の影がはっきりしない。
 着物を脱いで橋の端を踏むと、生死とも橋の下に住むあの娘と離れない。
 傘を担いで若者は道を急いで、傘や桑を担ぐ若者は川の方へ行く。
 傘を担ぐなら馴染みの傘を担いではいけない。私がいる限り、外の人と付き合わないように。
 傘を担ぐ若者は急いで出かける。傘を担ぐ若者ははるばる州に行く。
 あの若い娘は州に行つて、若者は県に行く。県の門で待ち合わせて縁組みとなる。

「盤王出世」

起已盤王先起已	盤王起已立春明（青）
黃龍又定五雷熟（水底偷歡喜）	專望五雷轉一声（鳴）
起已盤王先起已	盤王起已立春烟（開犁耙）
鯉魚水底偷歡喜	守到春間來念親（双）
盤王起已閏起已	盤王起已閏犁頭（耙）
鼠王過海偷禾種	黃龍含水忿禾頭（花）
盤王起已先起已	盤王起已閏犁耕（耙）
閏得犁耙也會使	屋底大塘谷報生（牙）
起已盤王先起已	盤王起已立春名（哀）
立得春名（哀）都足了	屋背秋田段々青（齊）
起已盤王先起已	盤王起已種苧麻（系）
種得苧系（麻）兒孫續	兒孫世代綉羅衣（花）
起已盤王先起已	初發苧麻（系）葉大求（花）
苧麻續紬不成苧	蕉蔴細小便成紬（羅）
起已盤王先起已	盤王已閏高起枷（機）
閏得高機（枷）織細布	布面有條李裯花（系）
着苧盤王先着苧	着蕉（苧）唐王先着蕉（苧）
盤王着苧世也好	唐王着蕉（羅）更消條（流落）
盤古流傳十二面	劉任手中無本錢
石崇富貴當天下	獨自歲寒其路邊
石崇踢亂金鷄卵	金鷄跌亂石崇身
出得三千客	劉任手中無本錢
人生忒世愛爭強	死入黃泉同路行
石崇富貴登天下	有錢無路買長生
人生一世愛爭（受）秋	羅伏能有幾個油
草生忒春抱種坐	人生忒世愛風流（灘）
人生忒世愛爭強	羅伏有伏幾個油
今世有衫今世着	莫留成世把人看（収）

貧々薄々成郎我
起屋沙州水灘過
當初富貴真富貴
三斗碎金使費了
當初富貴真富貴
有銀不如打飯盃
當初富貴真富貴
有銀不如打飯盃
當初富貴真富貴
銀銃在水金●竿
當初富貴真富貴
打銀來限又嫌白
當初富貴真富貴
富貴打銀限板過
又定富貴話
貧薄愛連富貴女
富 貴 人 (龍)
人家富貴般々有
盤古流傳十二面
出世凡人彈不得
琵琶頭
出世凡人彈不得
琵琶頭
出世凡人彈不得
琵琶 猺 (頭)
三面着刀修洛裡
琵琶頭
彈胸得娘心暗泣
三百貫錢買把笛
吹笛丁甲會吹笛
少板原來五郎做
四行拍
出世魯班雕花巧
大州出得花巧匠
流沙 落 好
流落出身不使信
流 落 不使大
石頭枉大不苦水
流落不使大
石頭柱大不等水

起屋沙州石上中 (邊)
富貴也成貧薄人 (窮)
三斗歲金又說窮 (貧)
富貴也成貧薄娘 (人)
打銀限屋杵 (樑)
吃飯得聞銀氣収 (香)
富貴打銀限飯生 (匙)
吃飯得聞銀氣詩 (生)
富貴打銀限橙頭 (光)
銀籃洗菜掛金鈎
富貴打銀限橙邊
打金來限又嫌黃
富貴打銀限板門 (平)
銀筋多梭遮妹門 (眉)
貧薄定娘話不同 (真)
富貴又嫌貧薄弱 (人)
人家富貴仔家窮 (貧)
仔家貧窮般々窮 (貧)
初甲琵琶十琶二弦 (名)
托 (帶) 下八弦彈四強 (石山廳水聲)
魯班雕挖是龍頭
帶下石山聽水愁
魯班彫挖是龍身 (頭)
玉女琵琶愁人心 (心裡愁)
三面着刀四面● (愁)
不過双陽氣影消 (愁)
琵琶彈背不彈頭 (胸)
彈背得娘心裡愁 (客)
又添四百古人吹 (連)
吹下劉山流嶺歸 (邊)
又着爐中偷過吹 (連)
四行拍了不還歸 (久)
魯班花巧更聰明 (流落)
盤王撲木做陰聲 (沙)
流落說得好防單 (身)
踏上州門成貴人 (郎)
郎是真金不使多 (真)
田螺須小等江河 (心)
郎是真々不使収
田螺須小等江洲 (難)

魯班置得千歌曲	托把凡人教子孫（世人）
便是流落接得唱	不是流落村对村（當意閑）
留山置得三江口	凡人接得在身頭（邊）
便是流落接得唱	将来撩起●行愁（連）

「盤王がこの世に現われる」

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王がこの世に現われたのは明るい立春だった。

黄竜がじっとして、五雷が熱くなる。黄竜が水底で密かに嬉しくなって、五雷が一声出すのを専ら望む。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王がこの世に現われた頃に、立春の煙が立ち犁起こしが始まる。

鯉が水底で密かに嬉しくなって、春までじっとこもった末に、親しい者に会いたくなる。

この世に現われる盤王は、ようやくこの世に現われた。この世に現われた盤王は鋤を作った。

鼠王は稲の種を盗みに海を渡った。黄竜は水を含んで稲の先に吹き掛けた。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王はこの世に現われて、鋤で田を耕した。鋤で田を耕すことがうまくでき、家の側の大きな池の畔に穀物が生えてきた。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王が現われたのは立春の頃だった。

立春になって、何事も整った。どの家も秋に収穫する田は一面青々となった。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王はこの世に現われてから芋麻^{チヨマ}を植えた。植えられた芋麻は息子や孫によって紡がれた。息子や孫は代々薄い芋麻布の着物に刺繡を施した。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。初めて伸びた芋麻の葉が大きくなった。

芋麻で芋麻布を織り、細い芋麻で薄い芋麻布を作った。

この世に現われる盤王は、もはやこの世に現われた。盤王は高機を作った。

作られた高機で目の細かい芋麻布を織ることができた。芋麻布の表に花模様が施される。

芋麻布の着物を着る盤王が最初に芋麻布の着物を着た。蕉の布の着物を着る唐王が最初に蕉の布の着物を着た。

盤王は芋麻布の着物を着て、世の中が太平になった。唐王は蕉の布の着物を着て、零落した。

盤古は十二の面に伝えられた。劉任は手元に金がない。

石崇の富貴は天下一番だった。年暮れのごく寒い時に道端で泊まる者もいた。

石崇が金鶏の卵を蹴り潰すと、金鶏はみだりに石崇の体に飛びかかる。

石崇は三千の食客を養うことができる。劉任は手元に金がない。

人間は一生高位を争うことに夢中になるが、死後に冥土に入れば、誰でも同じ道を歩くことになる。

石崇は天下一番の富貴だったが、いくらお金があっても長生を買う道はない。

人生は一生何に対しても争い、勝ってきたが、羅伏から搾り取れる油には限りがある。

草が春に種を抱きながら伸びて栄える。人間が一生風流を愛しむ。

人間が一生高位を争うことを好む。羅伏からいくらの油が搾り取れるか。

この世に着物があれば、この世で着るべきだ。後世に残って他人のものになることなかれ。

若者の私は貧乏な者として成長してきた。沙洲の上に粗末な家を建てた。

沙洲に建てられた家は水に流される。富貴な者でも貧乏な者に落ちぶれることもある。
昔の富貴な者は本当に富貴だったが、三斗の黄金を持っていても、貧乏だという。
三斗の黄金を使い切ると、富貴な者も貧乏な者となる。
昔の富貴な者は本当に富貴だった。富貴な者は家の梁に銀を施した。
銀があれば、茶碗に銀を施すとよい。飯を食べる時に銀の香りを嗅ぐことができる。
昔の富貴な者は本当に富貴だった。富貴な者は銀で匙を作るぐらいだった。
銀があれば、茶碗に銀を施すとよい。飯を食べる時に銀の香りを嗅ぐことができる。
昔の富貴な者は本当に富貴だった。富貴な者は銀で腰掛けを作るぐらいだ。
銀の鉤が水に垂れて、金の竿が用いられる（意味不明）。銀の籠で野菜を洗ってから、金の鉤に掛けておく。
昔の富貴な者は本当に富貴だった。富貴な者は腰掛けの縁飾りを銀で作った。
銀で作ったものは白っぽいから、嫌がられる。金で作ったものはあまりに黄色いから嫌がられる。
昔の富貴な者は本当に富貴だった。富貴な者は扉に銀を施す。
富貴な者の家は、扉に銀を施し、銀で飾られた簾が乙女の扉を遮る。
富貴な者は富貴な話をするが、貧乏な者の話はそれと違う。
貧乏な者は富貴な家の娘を嫁に貰いたいが、富貴な者は貧乏な者の貧しさを嫌う。
富貴な者、彼は富貴な者だが、若者の家は貧乏だ。
あの富貴な者の家には、何でもたっぷりあるが、若者の家は、赤貧洗うが如し。
伝わるころによれば盤古は十二の面があるといわれる。最初の琵琶には十二の弦が張られる。
凡人はこの世に現われた琵琶を弾くことができない。八本の弦を取り除いて、四本の弦を弾く。
琵琶の頭、魯班はそれに竜の頭の彫刻を施した。
凡人はこの世に現われた琵琶を弾くことができず、それを持って石山を下りて水の音を聞くと寂しい気持ちになる。
琵琶の頭、魯班はそれに竜の彫刻を施した。
凡人はこの世に現われた琵琶を弾くことができず、玉女が琵琶を弾くと人々に寂しい思いを起こさせる。
琵琶の頭、刀で三面を修理して、四面が整う。
刀で三面を修理して、双陽の節を過ぎないと使うことができない。
琵琶の頭、琵琶の背が弾かれるが、その頭を弾くことができない。
琵琶の胸を弾くと、あの娘の心を密かに泣かせる。琵琶の背を弾くと、あの娘の心を悲しませる。
三百貫の銭で一本の笛を買ったなら、さらに四百を足して、昔の人の吹いた古いものを買うことができる。
笛を吹く丁甲は笛を吹くことがうまい。笛を吹きながら劉山から下りて嶺を越えて帰る。
紗板はもともとから五郎の作ったもので、さらに密かに炉の中を通った。
もともとから四行の紗板を打ったが、四行を打ち終わると、やめておく。
この世に現われた魯班は、花の模様を彫刻することが巧みにできる。魯班は花を彫刻することが巧みだけでなく、非常に聡明な者だった。
大州から花模様を巧みにできる職人が出る。盤王は木を用いて音を出させる。
放浪はよいこと、放浪の話がよくできれば身を守ることができる。
放浪の出身は信じられ難いが、州の門に踏み上がることができれば、貴人になる。

放浪のことを大袈裟にしない方がよい。若者は真の黄金で、多く持たなくても差し支えない。石はどんなに大きくても、水が要らない。田螺は小さいものだが、川の水を待たなければならない。放浪のことを大袈裟にしない方がよい。若者は真心をもった者で、待たせてみようと思う必要がない。

石はどんなに大きくても、水が要らない。田螺は小さいものだが、川の水を待たなければならない。魯班は千首の歌曲を集めて、それを子孫に教え伝えるように凡人に託す。

放浪の者はそれらの歌を受け継いで歌う。一つの村から、もう一つの村まで放浪するほどの者ではない。

山を買うなら、三江口を買っておく。凡人はそれを受け継いで、自分のものにする。

放浪の者は受け継いだ歌を歌う。将来に、その歌が人々に寂しい気持ちを起こさせる。

「第三満段曲」

更深夜闌客来到来到主人門下起主人抄頭下
階兕行到主人龍貴家空身生落龍貴橈空口招
娘龍貴漿龍漿將龍貴貴龍漿歸去空傳富貴鄉
更深夜闌客来到抄橈下台客下馬客人下馬搖
雷聲是知人看雷發聲客人來時又逢雨立起馬
頭高丈五滿身裝果是龍鱗貴客出來愁敬人
黃銅好夾双缸板夾得缸成送官去送到官去
到官廷手把金牌双流淚郎時不使郎相送去時
不使白粉粧銀匙筋十三双羅利排々送上江黃銅
好夾官腰帶撩起官身官人愛黃銅生子兩頭垂正是官人
人飲酒歸官人飲酒中廳裡四邊官仔立牙起廳前白馬
踏地聲羅利排行送上京廳前好種楓木樹隨根生尾
堆垂紅鶴飛來休裡底紅鶴飛來又飛去飛上湖南七
黑路湖南江湖南押条牌黃鳥催隨路來廳前好種
青泥竹朝々担糞去塢根担糞塢根望笋長交秋七
月出嫩笋銅刀細切細寅寅有醋無塩淡殺人日頭
出早東江照照見客人遠路來客人頭戴廣南鎗
脚踏皮鞋床葉沙手把銀瓶斟老酒千勸萬勸
親客人客人東江日上雲郎在湖南召缸上船頭
缸尾浪修々踏上缸頭水急交缸頭點燈光油亮
照見遠鄉好缸上遠鄉缸上是龍鱗貴客出來
愁殺人郎在湖南身為客辭別郎家宅床頭撩
起火灰鹿辭別爺娘去世人郎在十五少年老了
着人欺着人言語報誰知眼淚流落胸前心裡想
郎在湖南身為客離別郎家宅人來客去但請茶
其說爺娘不在家郎在十五少年小朝々抄小立
胸前人怕人多立不還高樓望見壁葉段望見門
樓門閃開門得見縣官人貌堂堂好做官大官愛

伏大紗小官愛縛絲線縞金条羅帶尾堆垂正是
官人飲酒歸第弑雞啼正半夜第二雞啼天光了
弑双黄鳥叫啾々思着爺娘在遠州初出廳前看
雲霧雲霧暗山地下鳥南風吹上浪飛眉立起馬
頭郎去歸客人會飲長流酒郎來飲盞是茶芽前飲
龍漿成飲茶來時山高路又遠手拿茶盞泪拋沙路又遠
斟謝主人上馬茶客人會飲長流酒郎在飲盞飲微々坐
落櫂頭櫂尾垂坐落櫂頭櫂尾轉手拿笛子引娘
吹引唱引双歸吹下劉山劉嶺歸家寅卯二年賊馬返
百姓也憂官也憂官州官府不太平日夜拋刀上馬行衫
被縛來去打寨前寨成細思量不得太平歸本鄉白鳩
年生一對卵娘姊生郎獨一人弑人去嫁洛一鄉磨利
沙刀切断腸不信但看正二月弑双陽鳥叫愁々思着
爺娘在遠州思着爺娘在遠鄉寅馬二年賊馬
返郎小報娘々報哥湖南江口打銅鑼到處声傳賊
馬多衫被縛來去打寨寨前寨成檢來磨不得
太平奈若何寅卯二年賊馬返百姓也刀賊也刀湖南
江口掃条牌日夜長開刀劍鎗衫被縛來去打寨寨
前寨成息焦不得太平歸念橋寅卯二年賊馬返百姓
也慌官也慌湖南江口立刀鎗日夜声傳去賊鄉衫
被縛來去打寨賊寨前寨成細量不得太平歸本鄉
寅卯二年賊馬反百姓也憂官也憂湖南江口血
長流仔細思量心也憂衫被縛來去打寨寨前寨
成泪双流不得太平歸本州寅卯二年賊馬反湖南
江口殺人歸殺尺軍民不了時妻離子散不相見男男
女女受孤栖不得太平能轉歸寅卯二年賊馬反
湖南江口賊紛紛日夜殺人不了時殺尽江南無一個青
山平地断人烟不得太平歸種田

夜更けに客人はお見えになった。主人の家の門前に着くと、主人は早速階段を下りて迎える。竜貴という主人の家に来た。何も持たない客人は竜貴の家の腰掛けに座る。竜貴の娘から飲み物を貰った。竜貴の家の飲み物はとてもうまかった。帰って行くと、あそこは富貴の郷だと称えて伝える。

夜更けに客人がお見えになった。主人は腰掛けを用意して、階段を下りて出迎える。客人は馬から下りる。客人が馬から下りる時に、雷の音が聞こえる。誰かが来たお知らせのように雷が鳴った。客人が、来る時にあいにく雨に遭った。馬が頭をもたげると、その高さが一丈五になる。その体に竜の鱗を飾ったようだ。こんなに貴い客人が来られて、どんな風に扱ってよいかと戸惑う。黄銅の板を継ぎ合わせて船を作り、船を役所に送る。役所の庭まで送り、手に金の札を持ち涙が流れる。若者が出かける時に、見送るには具合が悪い。行く時に化粧をするにも具合が悪い。銀の匙、銀の箸十三揃い。下役はそれを川の方に送る。黄銅が役人の腰帯の飾りにされて、役人は

その飾りが好きだ。黄銅の穂が両側に垂れている。ちょうど役人は酒を飲んでから帰って来る。役人は広間で酒を飲む時に、その側に使用人が立っている。広間の前で白馬が地面を踏む音がする。下役は並んで都へ送る。広間の前に楓がたくさん植えられている。その根本から枝が生えた。赤い鶴が飛んで来て、その木の上に停まる。赤い鶴が飛んで来たり、飛んで行ったりする。湖南の七里路に飛び上がる。湖南の川、湖南の印としての札が立てられている。黄鳥に催促されて、その道に沿って来る。広間の前に青泥竹がよく植えられている。毎朝糞を担いでその根に掛けておく。糞をその根元に掛けて、竹の子が出てくるのを望む。秋の七月に柔らかい竹の子が生えてくる。それを銅の包丁でごく細く切る。酔はあるが、塩がないからおしくない。

太陽は早く昇って東江を照らす。客人が遠方から来たのを照らす。客人は頭に広南の槍のような頭巾を被り、足にサアサアと音のする靴を履いている。手に銀の瓶を持って客の酌をする。何回も客人に酒を勧める。客人は東江の太陽の昇る頃の雲のようだ。若者は湖南の船に乗って、船の先や船の尾に波が寄せては返す。船の端に踏み上がると、川の急流に遭う。船の端で灯を点けると、きらきらと光って、遠方にある若者の船を照らす。遠方の船には竜の鱗の飾りがある。貴い客人がお見えになると、とても不安になる。若者は客として湖南にいる。若者は故郷の家を離れた。床頭撩起火灰鹿（不明）。両親と別れて世間に出る。若者は十五歳の少年だ。年寄りになれば、人に馬鹿にされる。人に叱られたりすることがあっても、誰に訴えることができようか。涙が胸の前に流れて、心細くなる。若者は客として湖南にいる。若者は家を離れて行く。誰か来ると、茶を出すくらいだ。両親が家にいないという。

若者は十五歳の少年だ。背丈が低いので、毎日人の胸の前に立っているように感じた。大勢の人がいると、家に帰らない。緑の葉で飾られた楼閣が見える。開いている門も見える。そこにいる県の役人も見える。堂々たる風格を備えている立派な役人だ。地位の高い役人は上等の絹を好む。下役は薄い絹が好きだ。金の飾り物、絹の帯が身に着けられている。ちょうど役人は酒を飲んでから帰って来た。鶏が一回目に鳴くと夜更けになった。鶏が二回目に鳴くと夜が明けた。一對の黄鳥がチュン、チュンと鳴く。両親が遠い州にいることを思う。広間の前に出て、初めて雲や霧が見える。雲霧が山を暗くして、地面をもはっきり見えないようにした。南の風が波を吹き上げる。若者は馬に乗って行く。客人は酒をいくら飲んでもいいが、若者が来ても茶を飲むだけだ。客人はおいしい酒を飲むが、若者はまずい茶を飲む。来るには山が高く、道も遠かった。手に茶の杯を持ち涙が流れる。道は遠かった。馬に乗る前に茶を主人から貰って、感謝する。客人はおいしい酒を飲む。若者は少しの酒を飲んで、酔った。腰掛けに座ってみる。腰掛けに座ると、腰掛けが動くように感じた。手に持つ笛を吹いて、あの娘を呼び寄せる。さらに歌を歌いながら彼女と一緒に帰って行く。笛を吹きながら劉山劉嶺を下りて、家に帰って行く。

寅卯二年に馬賊が戻って来た。人々は心配し、役人も心配する。役所の治める州が太平でなくなる。人々は強いられ、砦を攻める為に、日夜刀を持って馬に乗って行く。砦の前後にいて、よく考える。太平にならないなら、故郷に帰ろうか。白鴿が一年に一對の卵を産む。母は一人で洛一郷に行って嫁になった。そこで一人の子を産んだ。磨かれた刀で腸を切ったような感じだった。信じないなら、二月に一對の陽鳥の悲しい鳴き声を聞けば分かる。遠い州にいる両親のことを思って、遠い故郷にいる両親を思う。寅卯二年に、馬賊が戻って来た。幼い若者は母に知らせると、母は兄に知らせた。湖南の江口でドラを蔽いて、馬賊が至るところにいると伝えている。人々は無理やり砦を攻める。砦の前後で武器を拾って研ぐ。太平にならない事態に直面して、どうしようか。寅卯二年に馬賊は戻って来た。人々は刀を持ち、賊も刀を持つ。湖南の江口で札が倒された。日

夜に刀、劍、槍が用意されている。無理やり砦を攻める。砦の前後にいと、心がイライラする。無事に帰ることはできない。寅卯二年に馬賊が戻って来た。人々は慌て、役人も慌てる。湖南の江口では刀や槍が立てられている。日夜馬賊が至るところにいと伝えられている。無理やり砦を攻める。砦の前後にいと、心がイライラする。太平にならない限り、故郷に帰ることができない。寅卯二年に馬賊が反乱を起こした。人々も心配し、役人も心配する。湖南の江口では血が長く流れた。つくづく考えて心配する。無理やり砦を攻める。砦の前後にいと、涙が流れる。太平にならない限り、もとの州に帰れない。寅卯二年に馬賊が反乱を起こした。湖南の江口で人々を殺す。兵隊や人々を多く殺した。妻が離れ、子が見えなくなった。大勢の男女がひとりぼっちになった。太平にならない限り、帰れない。寅卯二年に馬賊が反乱を起こした。湖南の江口には、賊が次から次へと来た。日夜に人を殺してやめない。江南の人々を尽く殺して、一人も残らない。青山や平地には、人間の炊事の煙が見えない。太平になって、家に帰って田を耕すことができない。

天子知得天何事
寒養偷吃寒風佩
樓上伏門有七縫
鎖匙又定鎖銅熟
樓上伏門有七縫
水底龍王龍女楸
女是樓上大婆女
十五年間捧養大
女是樓上大婆女
十五年間捧養大
女是樓上大婆女
十五年間捧養大
甘樵過籬十二節
樓上連双十二個
甘樵過籬十二節
樓上點燈樓下暗
當初得見娘嫌仔
色 嫁 早
又說鯉魚門樞大
說 嫁 早
又說鯉魚門樞大
女是樓上大婆女
三箱隨娘去出嫁
三百二人隨轎上
三百二人共把弩
麒麟山高原無石
上家原有愛討佩
長々揲 隔

老人知得古來音（情）
玉女得聞偷漢心（声）
佩（伏）了依還聖女開（声）
鎖匙拍得板門開（声）
伏了依還聖女開（声）
羅帶伏門誰敢開（収）
又是五婆養出身（娘）
台巷排來當十人（娘）
又是五婆養出身（姑）
海岸唐王來問親（書）
又是五婆養出身（郎）
留把唐王來討双
又知那節是真糖
不知那個是真双（児）
不知那節是真衣（中心式節是真糖）
地上點燈樓上光（陰）
世今得見仔嫌娘（人）
也為大哥色嫁从（高）
又說衣衫七貫錢（里年平坑高）
也為大哥說嫁長（多）
又說里羊平坑崩（象牙龍角梳）
裝嫁黃金有七千（箱）
四箱在屋守爺人（娘）
得見木格獺早羊（把婆頭是娘）
又請五婆路上松（五婆听五但弦声）
羅伏水底水多魚
花女原來愛討夫
微々忙々海中央（心）

白藤生上劉山岸	高標生下海中中（心）
大是劉山劉嶺大	高是石山石嶺高（長）
劉山生上劉王殿	石山生下海中牢（央）
大是劉山劉嶺大	沉（底）是石山石嶺沉（底）
劉山生上劉王殿	石山生下海中心（西）
大是劉山劉嶺大	高是石山石嶺高（長）
百姓爭田打相打	貴州門下立鎗刀（刀鎗）
大是劉山劉嶺大	沉（長）是石山石嶺沉（長）
了々數得林中竹	閻羅數盡是今人（世間娘）
修國秀才愛修國	秀才修國愛修因（行）
秀才修國傳天下	便是金花關路生（新）
修國秀才愛修國	秀才修國愛修為（求）
秀才修國傳天下	便是金花關路垂（收）
着白秀才身着白	道士着烏身着烏（青）
秀才着白對官坐	對佛烏（青）
師人出來頭戴赤	道士着烏頭戴青（冠）
師人着衫定鬼話	銅鈴忽得鬼分明（陰陽）
又定老君熟	老君又定釈迦行（親）
老君接得五雷水	師人喝得死亡身（人）
有女莫嫁師人屋	嫁落師人得命長（成）
師人又是觀音佛	着病三朝得救娘（人）
有女莫嫁師人屋	嫁落師人惹鬼多（興）
嫁落師人多惹鬼	日夜着娘不奈何（得眼）
十二遊師齊學法（出路）	六師得法六師空（興）
六郎得法傳天下（六郎得飲齊眉醉）	六師無法口中強（不得半杯嘗）
十二遊師十二樣	也有琵琶也有爭（吹）
也有吹得歌堂散	也有吹唱引雙行（歸）
日頭東海沙洲上	照見連州連大平（村）
照見連州連大國	玉女連村把北行（同佛飲酒把雙瓶）
日頭東海沙洲上	夜落紫微嶺上歸（行）
紫微嶺上南風發	也會烏雲雨路飛（生）
烏雲生	蓑衣斗笠貼身行
蓑衣斗笠貼身去	又定楊柳向前行
烏雲生	橫木作橫爭
又定橫木向前去	又定弓箭向前行
烏雲生	官缸貼缸行
又定官缸向前去	又定刀子向前行
烏雲生	燈火
又定燈火向前去	便是火烟天上行
東海南蛇吞得像	西海鼠毛七寸長（深）

南蛇吞像五婆見
大州粟米刀頭々
粟米枉大五婆見
二十四州官州多有(分)
郎今不是流落子
英台原在四州住
祝家無男生一女
青松樹底排年己
讀書三年共學院
二人逢々大路去
三百二人齊入學
風過樹頭梁山伯
讀書三年共學院
風過樹頭梁山伯
讀書三年共學院
風過樹頭梁山伯
朝々茶飯共台吃
風過樹頭梁山伯
英台着衫千百給
風過樹頭梁山伯
三百二人齊下水
三 月 三
看得春花(為)心儼乱
高機織布々烟々
山伯解衫來定我
山伯不奈吞衣死
吞衣不死吞刀死
山伯不奈吞衣死
人双過路偷彈子
山伯不奈吞衣死
英台嫁在大州(路)上
生時連々共把扇
不念死了念
生時連々共搨把
不念死了念
生時共攬死同眠
二十州官正山欺
担鍬挖泥七尺深
東海不通撐缸過
二十四州官大州大

鼠毛七寸聖人量(尋)
貴州李子二人扛(更)
李子枉大聖人扛(爭)
文章寫水祝英因(台)
但說龍言今句開(明)
地名脚報白沙田(灘)
地年全靠接金言(文章)
三百年生有己年(多)
英台在成答書信(箱)
又有無缸過大江(鄉)
英台在成答書行(箱)
缸行水面祝英台(田)
因何不習女身才(青)
缸行水面祝英長(亭)
不識英台是女娘(人)
缸行水面祝英台(田)
夜眠羅帳共頭眠(齊)
缸行水面祝英台(晒皇天)
解得衫開天大光(日上天)
缸行水面祝英長(英塵)
不圖身濕且圖涼(陰)
先生放學看春花(為)
英台心乱各歸家(回歸)
山伯解衫來定親(双)
梁山不嫁々別人(郎)
橫吞刀子直吞鎗(針)
刀子橫僚斬断腸(心)
葬在大州大路中(辺)
秀才過路撥沙壩(田)
送上大州大路邊(齊)
梁山協入裡頭齊(眼)
死在黃泉共合从(珠)
死入黃泉共得連(鬪)
死在黃泉共合从(珠)
死了陰世正來連(鬪)
送在大路大路辺
三十六步河東海長(元)
飛上半天系傘纏
新水流來入貴鄉(村)
三十六步河東海深(元)

東海不通撐舡過（細官席）	西海不通師洗身（出銀又出金）
二十四官州大州大	三十六步河東海深（長）
東海出得天香國（西牛角）	出世師人个々尋（吹）
二十四官州大州大	三十六步河東海齊（元）
東海不通撐舡過	西海不通撐大排（舡）
二十四官州大州大	大州枉大貴州高（長）
大州枉大洛州尾	貴州須小洛中牢（央）
二十四官州大州大	大州枉大貴州愁（城）
大州枉大洛州尾	貴州須小洛州頭（廷）
二十四官州大州大	大州在大貴州城（長）
大州出得生人胆	貴州出得死亡人（娘）
二十四官州大州大	大州枉大貴州頭（腸）
大州出得長鎗榜	托下貴州入陣愁（場）
大州姓藤篾伏屋	貴州人貴賤人多（寶）
大州賤淡吃塩水	地樓（羅）細小吃塩羅（田）
橫托州門七尺濶	直托縣門八尺高（城）
莫怪歌詞相說報	州門掛榜半天廷（高）
大州打上七里路	從縣到州七路高（城）
莫怪歌詞相說報	從縣到州七冒牢
大州打上七里路	路城
	路底（城）
莫怪歌詞相說報	州里得聞縣馬西（声）
大洲置凡千千戶（打上七里路）	橫鎗載米万由郎（鄉）
州上功名無萬个	个々出来敬奉娘（郎）
大州置凡七千戶	橫鎗載米万由人（郎）
大州出得好青米	運下貴州養聖人（娘）
置凡七千戶	橫倉載米万由名（条）
莫怪歌詞相說報	又置路詩通到京（朝）
日頭相賭天星上	七星相賭月邊行（聞）
大州相刻海心上	官人相刻入州門（廷）
裡頭置学院	貴州兩路置書堂（言）
出世凡人讀不盡	天子讀書万書公（秀才）
大州裡頭置学院	貴州兩路置書公（秀才）
置得書公相公（秀才州里）坐	佛前書卷不離胸（台）
大州裡頭置学院	貴州裡頭置書公（書生）
置得書公（生）州裡坐	又置筆頭手裡龍（行）
大州裡頭置学院	貴州兩路置書高（廷）
置得書高（廷）書公坐腰	腰上又係絲線滔（青）
大州裡頭置学院	学院也完（平）州也完（平）
学院也完（平）州也完（平）	徐司相刻入州門（廷）

猫児上得相公宅
墨盤對 坐
老鼠偷吃貌兒飯
不信便看明月晏
老鼠偷吃貌兒飯
不信便看明月晏
猫人愛担格木弩
罪人担枷牢裡坐
猫人愛担格木弩
罪人担枷牢裡坐
朝過州門怕不怕
青山出来纏州来轉
莫怪歌詞相説報
朝過州門怕不怕
玉犬原来巷上吠
盤州大缸七尺濶
莫怪歌詞相説報
盤州大缸七尺濶
架得缸頭貼缸去
東海龍門出石印
南安寺裡出金水
大缸立立三江口
盤王歌詞都唱了
盤王歌完了

皮鞋上得相公前 (廳)
筆頭對得相公言 (名)
猫児寫狀下街論 (告)
老鼠担枷入縣州 (街)
猫鼠寫狀下街論 (告)
老鼠担枷入縣門 (牢)
散客客担桑柘枯 (鎗)
公人無事説風鬪 (章)
散客担桑愛格柘
公人無事説風飄 (想)
夜過縣門驚 (休) 不驚 (休)
書字出来驚撲京 (休)
聖人入州洛聖遊 (迎)
夜過縣門京古 (大) 声
更鼓来門原上声 (州門更鼓不曾停)
缸行水底七行分 (丁)
大缸逢破見天門 (星)
架起缸頭万丈高 (長)
缸頭缸尾立鎗刀 (刀鎗)
西海龍門出石球 (螺)
貴州洞口出金魚 (鵝)
石頭累々等江灘 (州)
不知那路向河灘 (流)

天子は天上の何事もよく知り、年寄りも古来の情況をよく知っている。

寒養は寒風佩をこっそり食べ、玉女は泥棒の声を聞く。

二階の伏門には七本の隙があり、聖女はその扉を開けることができる。

掛けている鍵は銅で作ったもので、この鍵で板の扉を開くことができる。

二階の伏門には七本の部屋がある。聖女はその扉を開けることができる。

水底は竜王、竜女の住むところで、祭司の身に着ける帯で繋がっている門を誰が敢えて開けようか。

娘は二階にいる者で、大切に育てられた者だ。また、五婆の世話で少女へと成長した。

十五年の間によく育てられてきた者で、巷で十人の娘が列をなせば、彼女は一番優れた者だ。

娘は二階にいる者で、大切に育てられた者だ。また、五婆の世話で少女へと成長した。

十五年の間によく育てられてきた者で、海岸の唐王は縁組を求めに来た。

娘は二階にいる者で、大切に育てられてきた者だ。五婆の世話で少女へと成長した。

十五年の間に大切に育てられてきた者で、宿命的に唐王は縁組を求めに来た。

砂糖黍は垣よりも高く伸び、十二の節がある。どの節から本当の砂糖ができるか、分かりにくい。

二階に同居している若い男女が、十二組いるが、誰と誰が本当の夫婦だか分からない。

砂糖黍は垣よりも高く伸びると、中央の一節に本当の砂糖ができるはずだ。
二階に明かりを点すと、階下が暗い。地上で明かりを点すと、二階は明るくなる。
初めは娘が若者を嫌うように見えたが、今世の中では若者が娘を嫌うように見える。
媒酌人が早く来た。若者に頼まれた媒酌人が来た。
媒酌人のいうことには、あの家の大きな扉には鯉が綺麗に描かれている。さらにあの家の着物は七貫銭の価値があるという。
媒酌人が早く来た。若者に頼まれた媒酌人は度々来た。
媒酌人のいうことによれば、あの家の大きな扉に鯉が綺麗に描かれている。さらに、あの家には象牙や竜の角で作った櫛があるという。
娘は二階で大切に育てられた娘だ。嫁入りの時に持たせられたものには七つの箱の黄金がある。
娘は嫁入りの時に三つの箱を持って行く。四つの箱を両親の為に残しておく。
三百二人は嫁入りの輿について行く。得見木格瀬早羊（不明）。
三百二人は皆石弓を持っている。五婆には弦の音だけが聞こえる。
麒麟山は高いが、もともとその上に石はない。羅伏の水底には魚が多くいる。
上の家はもともと嫁を貰いたい、花のように綺麗な娘はもともと嫁に行くつもりだ。
長長揆？隔（不明）、広々と果てしない大海の中央にあるようだ。
白い藤は劉山の麓に生えている。高標は海の真ん中に生えている。
大きなものといえば、劉山の劉嶺は大きなものだ。高いものといえば、石山の石嶺は高いものだ。
劉山には劉王殿がある。石山は海の真ん中にある。
大きなものといえば、劉山の劉嶺は大きなものだ。重いものといえば、石山の石嶺は重いものだ。
劉山には劉王殿がある。石山は海の真ん中にある。
大きなものといえば、劉山の劉嶺は大きなものだ。高いものといえば、石山の石嶺は高いものだ。
百姓は田を争う為に殴り合う。貴州の門のもとに刀と槍が立っている。
大きなものといえば劉山の劉嶺は大きなものだ。重いものといえば、石山の石嶺は重いものだ。
蟬は林の中の竹を数えることができる。閻羅は今の世間の人を数え尽くすことができる。
国を治めたい秀才は国を治めることを大切に、秀才は国を治める為に徳を修める。
秀才が国を治めることは世間に普く伝えられるが、それは金の花が道端で生えるように珍しいことだ。
国を治める秀才は国を治めることを大切に、秀才は国を治める為に徳を修める。
秀才が国を治めることは世間に普く伝えられるが、それは金の花が道端で生えるように珍しいことだ。
白い着物を着るべき秀才は白いものを身に着ける。黒い着物を着るべき道士は黒いものを身に着ける。
秀才は白い着物を着て役人に向かって座る。道士は黒い着物を着て仏様に向かって座る。
師人は出る時に赤いものを頭に被る。道士は黒い着物を着て、青いものを頭に被る。
師人は特別の着物を着て、必ず鬼の話をして、銅の鈴を持って、直ちに鬼がはっきりと現われる。
師人と老君とは親しい仲間だが、老君はさらに釈迦と親しい仲間だ。
老君は五雷水を受け取る。師人はそれを飲んで死んでしまう。
家に娘があれば、師人の家の嫁に行かせることなかれ。師人の嫁に行けば、その命令に従わねばならない。

師人は観音仏だといわれる。三日間で病気になった娘を救うことができる。
家に娘があれば、師人の家の嫁に行かせることなかれ。師人の家の嫁になれば、多くの鬼を招く。
師人の家の嫁に行けば、多くの鬼を招くので、娘は日夜安心できない。
十二人の遊師は共に法を学ぶが、よく法を学んだのは六人で、他の六人は無駄になった。
法をよく学んだ六人の師の名前は天下に伝えられている。他の六人の師は法をよく学ぶことができなかった。
六人の師は斉眉酒を酔うほど飲んだが、他の六人は半杯も飲むこともできない。
十二人の遊師は十二の異なった姿をしている。琵琶を持つ者もいるが、笛を持つ者もいる。
その楽器の音が歌祭の終わりまで響いた。その音楽を聴きながら、若者と娘が二人揃って帰って行く。
太陽は東海の砂浜を照らすように昇って、連州の連大村をも照らすようになった。
太陽は連州に連なる大国を照らす。玉女は連州を通して北の方へ行く。仏様と二瓶の酒を飲む。
太陽は東海の砂浜を照らすように昇って、夜に紫微嶺の上から落ちて帰って行く。
紫微嶺の上から南風が吹き出す。黒い雲が出て、雨が道を濡らすこともある。
黒い雲が湧いて来ると、蓑を身に着けて、笠を被って行く。
蓑を身に着けて、笠を被って、柳の茂る道に向かって前へ行く。
黒い雲が湧いて来た。さらに横木を目当てにして前へ行く。
さらに横木を目当てにして前へ行くと、弓や矢を目当てにして前へ行く。
黒い雲が湧いて来た。さらに役所の船を目当てにして前へ行く。
さらに役所の船を目当てにして前へ行く。さらに刀を目当てにして前へ行く。
黒い雲が湧いて来た。さらに燈火を目当てにして前へ行く。
さらに燈火を目当てにして前へ行くと、その煙が天を突くほど立ち昇って行く。
東海の南蛇は象を呑み込むことができる。西海の鼠の毛の長さは七寸ある。
南蛇が象を呑み込むことは五婆が見つけた。鼠の毛の長さが七寸だということは聖人の量ったものだ。
大州の粟米は刀で刈られる。貴州の李子は二人で担ぐ。
大きな粟米は五婆が見つけた。大きな李子は聖人に担がれた。
州に二十四人の役人がいる。祝英台のことは文章に書いてある。
若者は今は流落の子でなく、優美な言葉で今そのことを話す。
英台はもともと四州に住んだ。その地名は白砂灘という。
祝と名乗る家には男の子が無く、一人の娘だけが育てられた。この若い娘が文章を継ぐこととされた。
青い松の下で年を経て、三百年以来の習わしだ。
この学院で三年ほど一緒に読書した。英台は返事の手紙を寄せた。
二人は大道を一緒に歩いて行くが、広い川を渡る船がない。
三百二人は同時に入学した。英台は返事の手紙を寄せた。
梁山伯は木の上を通った風のような者で、祝英台は水面を通った船のような者だ。
三年の間一緒に学院で学んできたのに、どうして彼女が娘であることが分からなかったのか。
梁山伯は木の上を通った風のような者で、祝英台は水面を通った船のような者だ。
三年の間一緒に学院で学んできたのに、どうして彼女が娘であることが分からなかったのか。

梁山伯は木の上を通った風のような者で、祝英台は水面を通った船のような者だ。
毎朝茶や飯を一つの食卓で食べてきた。夜には薄い絹の帳が近寄って来るような所で眠っていた。
梁山伯は木の上を通った風のような者で、祝英台は水面を通った船のような者だ。
英台は着物を着たり、脱いだりしたことが何回もあるが、それを見つけていたら、分かっただろう。
梁山伯は木の上を通った風のような者で、祝英台は水面を通った船のような者だ。
三百二人は同時に川に潜り込んだ。体を濡らしたいのではなく、涼みたいのだ。
三月三日に、花見をさせる為に先生は学生達を休ませる。
春の花を見ると、心が乱れるようになる。学生達は各々家に帰って行く。英台も心を乱して家に帰る。
高い紡織機で布を長々織っているうちに、山伯が縁組を願う為に来た。
山伯は私と縁組を結ぶように願ったが、梁山伯の嫁に行くことは許されず、他郷の嫁に行かされることとなった。
山伯は致し方がなく自殺した。刀を横に呑み、針を真っ直ぐに呑み込んだ。
刀を呑み込んで死んだ。刀が腸を切り裂いてしまった。
山伯が致し方がなく自殺した後に、大州の大道の道端に埋葬された。
その道を通る夫婦は静かに小石をその墓に添える。秀才達はその道を通ると、砂を添えてやる。
致し方なく山伯は自殺してしまっただ。大州の大道の道端に送られて埋葬された。
英台は大州に嫁に行かされる途中で死んで、山伯の墓に入った。
生きていた時には、一緒に扇を持って涼んだことがある。死後冥土で一緒になった。
生きていた時には、本心をお互いに打ち明けることはなかったが、死後冥土で何もかも打ち明けた。
生きていた時には、扇を持って一緒に涼んだことがある。死後冥土で一緒になった。
生きていた時には、本心をお互いに打ち明けることはなかったが、死後冥土で何もかも打ち明けた。
生きていた時には、一つの長い腰掛けに座っていたが、死後一緒に眠った。大道の道端に送られて埋葬された。
二十州の役人は正山欺、幅三十六歩の川は東海へ流れて行く。
鍬を担いで深さ七尺の泥を掘り起こす。泥が天を突くほど飛び上がった。
東海を通れないなら、船を漕いで渡る。新しい水が貴村に流れて来る。
二十四人の役人のいる州は広い。幅三十六歩の川は深く東海へ流れて行く。
東海は渡りにくいので、船を漕いで渡る。西海から銀や金が取れる。
二十四人の役人のいる州は広い。幅三十六歩の川より東海は深い。
東海から西牛角が取れる。出世する師人は皆西牛角を吹く。
二十四人の役人のいる州は広い。幅三十六歩の川が東海へ流れて行く。
東海は渡りにくいので、船を漕いで渡る。西海は渡りにくいので、大きな船を漕いで渡る。
二十四人の役人のいる州は広いが、貴州の高さには及ばない。
大州は広いが、洛州の端にある。貴州は小さいが、洛州の中央にある。
二十四人の役人のいる州は広い。貴州には城がある。
大州は広いが、洛州の端にある。貴州は小さいが、洛州の中央にある。
二十四人の役人のいる州は広い。大州は大きい、貴州の方が長い。

大州では、見知らぬ人が大胆に横行できるが、貴州では命懸けだ。
二十四人の役人のいる州は広い。大州は広いが、貴州は中央だ。
大州には槍を売る掲示が出されている。その槍を持って貴州の陣地に入る。
大州では藤という姓を名乗る者は竹の家に住む。貴州の人は尊ばれるが、卑しい者も多い。
大州では味の薄いものが嫌われるので、塩水を飲む。地羅のような小さいものは塩田で塩を食う。
州の門を横に量ると、七尺の幅がある。県の門を縦に量ると、八尺の高さがある。
歌詞を怪しむことなく伝え合う。州の掲示は州の門に天を突くほど高く掲げられている。
大州までは七里の道程がある。県から州までは七本の道がある。
歌詞を怪しむことなく伝え合う。県から州までは七本の道がある。
大州までは七里道程がある。県から州までは七本の道がある。
歌詞を怪しむことなく伝え合う。州の中で県の馬の音が聞こえる。
大州は数千以上の戸数がある。村から槍を持って来て米を積み込んで運ぶ。
州に功名のあるものは万人にはならないが、出世すれば皆母に孝行する。
大州は七千の戸数がある。村から槍を持って来て米を積み込んで運ぶ。
大州には、よい青米ができる。それを貴州まで運んで聖人を養う。
大州は七千の戸数がある。万以上の横倉に米が積んである。
歌詞を怪しむことなく伝え合う。道の両側に置かれた詩が都まで伝えられる。
太陽は空で星と賭けをする。七星は互いに賭けをしながら月の側を通る。
大州は跡を海の中に残す。役人は跡を州の庭に残す。
大州には学院が置かれる。貴州の両路には書堂が置かれる。
出世する凡人は書物を読み尽くすことができない。天子は読書させる為に、秀才を万人も育てた。
大州には学院が置かれる。貴州の両路には秀才が出る。
秀才は州の学院に座す。仏の前では書物が台を離れない。
大州には学院が置かれる。貴州の中には書生がいる。
書生は州に座す。さらに筆を持って字を書く。
大州には学院が置かれる。貴州の両路には書房が置かれる。
書生は書房に座す。腰に青い絹の紐を結びつけている。
大州には学院が置かれる。学院ができあがると、州の任務も完成する。
学院ができあがると、州の任務も完成する。徐司は誘い合って州の門に入る。
猫は秀才の家に入ることができる。皮の靴を履くと秀才の広間に入ることができる。
硯は秀才と向かい合っている。筆は秀才と向かい合って、いわれた言葉を綴る。
鼠が猫のえさを盗み食いすると、猫が訴訟状を書いて町の通りを回る。
これを信じないなら、明るい月の昇る時に、鼠が首かせをはめられて、県の町に入るのをご覧なさい。
鼠が猫のえさを盗み食いすると、猫は訴訟状を書いて町で訴訟を起こす。
これを信じないなら、明るい月の昇る時に、鼠が首かせをはめられて、県の門に入るのをご覧なさい。
猫を飼う人は格木の石弓を担ぐことを好む。普通の人は桑柘鎗を担ぐ。
罪人は首かせをはめられて牢屋に座る。役人は仕事がないれば世間話をする。
獐人は格木の石弓を担ぐことを好む。普通の客は桑を担いで格柵を好む。

罪人は首かせをはめられて牢屋に座る。役人は仕事がなければ世間話をする。
 朝に州の門を通る時に怖がるか、怖がらないか。夜に県門を通れば、驚くか、驚かないか。
 青山から出て来て州を回る。習字が上手にできて、都の者を驚かせる。
 歌詞を怪しむことなく伝え合う。聖人は州に入って、洛聖に迎えられる。
 朝に州の門を通る時に、怖がるか、怖がらないか。夜に県門を通れば、大声が聞こえる。
 玉犬はもともと巷で吠える。州の門に夜の時刻を知らせる太鼓の音はやむことがない。
 盤州の大船は七尺の幅がある。船は水底から随分離れて航行する。
 歌詞を怪しむことなく伝え合う。夜、大船は波を破って、星が見える。
 盤州の大船は七尺の幅がある。舳先を高くすれば、万丈の長さになる。
 舳先を高くして、他の船と近寄って通って行く。舳先と船尾に刀や槍が立っている。
 東海の竜門に石印を産する。西海の竜門に石の珠を産する。
 南安寺に金水が出る。貴州の洞口に金魚を産する。
 大船は凜々しく三江口に立っている。砂洲には石ころがたくさんある。
 盤王の歌詞は全部歌い終えた。どの道が砂洲まで行くことができるか、分からない。
 盤王歌完了する。

石榴生過石榴嶺	石榴生過石榴山（源）
人話石榴不生子	石榴生子洛青山（山源）
石榴生過石榴嶺	過石榴頭（中）
人話石榴不生子	石榴生子洛山頭（深中）
石榴生過石榴嶺	過石榴灘（盃）
人話石榴不生子	石榴生子洛深灘（盃）
石榴生過石榴嶺	過石榴田（塘）
人話石榴不生子	石榴生子洛深田（塘）
石榴生過石榴嶺	過石榴村（郷）
人話石榴不生子	石榴生子洛人郷（半天行）
石榴生過石榴嶺	過石榴平（州）
人話石榴不生子	石榴生子滿天行（遊）

柘榴は柘榴嶺を通過して一面生長した。柘榴は柘榴山を通過して一面生長した。
 人々は柘榴が子を産まないというが、柘榴は洛青山で子を産む。
 柘榴は柘榴嶺を通過して一面生長した。柘榴は柘榴の中で子を産む。
 人々は柘榴が子を産まないというが、柘榴は洛山の頂上で子を産む。
 柘榴は柘榴嶺を通過して一面生長した。柘榴は柘榴の砂洲で子を産む。
 人々は柘榴が子を産まないというが、柘榴は洛深の砂洲で子を産む。
 柘榴は柘榴嶺を通過して一面生長した。柘榴は柘榴の田を通過して子を産む。
 人々は柘榴が子を産まないというが、柘榴は洛深の田で子を産む。
 柘榴は柘榴嶺を通過して一面生長した。柘榴は柘榴村を通過して生長した。
 人々は柘榴が子を産まないというが、柘榴は洛人の郷で子を産む。
 柘榴は柘榴嶺を通過して一面生長した。柘榴は柘榴州を通過して子を産む。

人々は柘榴が子を産まないというが、柘榴の産んだ子は方々に行き渡る。

「又第四葉荷葉」

荷葉盃中松柏武柏上青山松樹能歸能海
又●花求官愛念求官念打手籠打得手籠●
手裡睡到五更流去五更流去入花宮几時落日
几時落日得相逢荷葉會中荷過岸葉歸
海岸日歸海岸滿河流黃桑葉落黃桑落正
合毬青着羅衫帕不伏滿身裝果滿身裝果掃
泥塵荷葉歲中真荷葉几般荷葉几般荷葉几
般黃郎來一夜郎來一夜到天光抄手四行裝
老大四行坐大寬坐位寬々坐位郎回鄉回鄉轉步
回鄉轉步斷中央荷葉金郎孤獨無人攬無祿
不成人朝々掃屋朝々掃屋着人在養得三
年郎孤大帶下廣州打事廣州打事十三双
官人出看官人出看歲寒郎荷葉歲中
傅女好路逢菓子不曾嘗托歸家裡托歸家
裡養爺娘爺娘養得自苦難五更点照五更点照
●爺娘睡含爺娘睡含好苦干昨夜五更得個夢
夢見蓮花發蓮塘花發白連々朝々摘上朝々摘
上佛前夢摘得一枝捨事佛十分捨事十分捨事又
嫌捺手拿卦子手拿卦子定陰陽今夜五更花早
發隨哥隨哥隨哥隨嫂又隨兄眼含眼泪眼含眼
泪不曾停三人隨娘共攬坐手拿笛子手拿笛子引
娘吹引吹引唱引唱（吹）引唱引双歸昨夜五更得個夢
々見州廷相打州相打使金鎗龍鱗衣甲龍鱗衣
使金鎗父母本錢千萬貫隨娘心願隨娘心願討成双
銅刀打鐵打鈎帶下深塘獨釣深塘獨釣鯉魚腮
托歸家裡慢除鱗三分除鱗莫放去徑過龍門
水埠頭龍門水埠裡頭居葉歸海岸托歸海岸
滿台鋪羅利荷葉盃馮宗得名字排來宗得馮
三郎當初十七十八儼人愛世今老了世今老了
着人藏思量眼泪思量眼泪落双双
中華民國三十一年癸未歲端月十九日愚兄王繼緣謹抄記

「又第四葉荷葉」

蓮葉杯の中には、松柏の模様がある。柏の上の青山には松の木がある。帰ろうか、海に行こうか、花見に行こうか。役人の地位を求め、役所のようなところを求める。手籠を探す。手籠を手に入れる。夜の五更まで眠った。五更が過ぎた。花の宮に入る。太陽が何時沈むか。太陽が何時沈んで、出会うことができようか。見渡す限り蓮の葉が岸までいっぱい生えた。葉が海岸まで渡った。

太陽が海岸まで照らす。黄色い葉が川いっぱい流れる。黄色い桑の葉が落ちる。薄い絹の着物は季節に合わなくなった。厚い着物に着替える。厚い着物に着替える。泥埃になった落葉を掃く。蓮の葉の季節が過ぎた。蓮の葉がどれくらいあっただろう。全ての蓮の葉が黄色になった。あの若者は一夜来た。若者は夜に来て暁まで泊まった。手荷物を用意してから、ゆっくり座る。若者は故郷に帰って行く。故郷に立つ。故郷に立つ前に、しばらく停まった。蓮の落葉のような若者は孤独になるだろう。世話をしてくれる者はいない。禄がなければ立派な者になれない。毎朝部屋を掃く。毎朝部屋を掃く。孤独な若者は三年の間に他人に育てられた。他人について広州に行って働いた。広州で働いた。十三双。役人は出て見回った。役人は出て、寒さを耐えている若者に会った。蓮の葉の茂った頃に、あの娘が無事であることが伝えられてきた。道で菓子に出逢ったが、嘗めてみなかった。家までそれを持って帰る。それを持って家に帰って両親に嘗めさせる。両親は苦勞して自分を育て上げた。夜の五更にも灯りを点けて面倒を見てくれた。夜の五更にも灯りを点けて面倒を見てくれた。両親は金よりも貴重な者だ。両親はよく眠れないほど苦勞をした。昨夜の五更に夢を見た。蓮の花が咲いた夢を見た。蓮の池に花がいっぱい咲いた。毎朝それを摘んだ。毎朝それを摘んだ。仏様の前に摘んだ花を一本捧げる。真面目に捧げた。真面目に捧げた。それでも足りないと思う。手に卦子を持って陰陽を定める。今夜の五更に花が早くも咲くだろう。兄について、兄について、兄と兄嫁について行く。目に涙を浮かべる。目に涙を浮かべるとまらない。三人は母について、一つの長い腰掛けに腰を掛ける。手に笛を持つ。手に笛を持って笛を吹いてあの娘を誘う。笛を吹いて誘う。笛を吹いて歌を誘う。歌を誘う。一緒に帰ろうと誘う。昨夜の五更に夢を見た。州の役所で殴り合う夢を見た。州の役所で殴り合った。金鎗を持つ。竜の鱗のような鎧を着けていた。竜の鱗のような鎧を着けていた。金鎗を持っていた。両親は千万貫のお金を持っている。娘の心からの願いを叶えることができるようになった。娘の心からの願いが叶って縁組になった。銅刀で鉄を打って鉤を作る。一人で鉤を持って深い池で釣りをする。一人で深い池で鯉を釣り上げた。それを持って家に帰ると、ゆっくり鱗を落とす。少しも残さずに鱗を落とす。真っ直ぐに竜門の水埠頭を通る。竜門の水埠頭のあたりに住んでいる。葉は海岸に帰る。持って帰る。机の上に羅利蓮の葉の杯が置かれている。馮宗という名前を貰った。家族から馮三郎と名付けられる。最初十七歳か、十八歳の頃に愛されていた。今では年寄りになった。今では年寄りになったから、人に嫌がられるようになった。思えば涙を流す。思えば涙が止めどなく溢れ出た。

中華民國三十一年癸未歲（1942年）五月十九日愚兄王繼縁により抄写する。

本事例の『盤王大歌』は内容が一つの物語をなし、展開するのではなく、全く脈絡なく不規則な配列をしており、タイトルが明記されておらず個々の内容も難解で把握しづらいが、後に注で示す他の地域のテキストの構成を参考にしながら構成要素を整理する^(きり)。最初から起声唱・齊入席・隔席唱・論娘唱・日頭出・日正中・日落江・日落西・日落鳥・日頭過江・夜深深・夜黄昏・天上星・月亮亮及び第一紅紗曲、次に天大旱・見怪歌・天暗鳥・北邊暗・洪水発・雷落地・葫蘆・伏羲・洪水盡・為婚了及び第二山逢閑曲、次に造得地・置天地・唱王打水・深山竹木・唐王出世・信王出世・玉女梳頭・白涼扇・坦傘・盤王出世・石崇・富貴・琵琶頭・紗板・魯班及び第三滴段曲、次に楼上伏門・大婆女・説婚早・劉山・秀才・師人・十二遊師・鳥雲生・五婆見・英台・山伯・生時・大州大・大州・老鼠・大缸・石榴生及び第四葉荷葉と四つのまとまりで成立している。中でも盤王の事跡を扱った「盤王出世」部分を以下に取り上げると、ここでは盤王は立春の日に生まれ、盤王は鋤を作り、田を耕し、穀

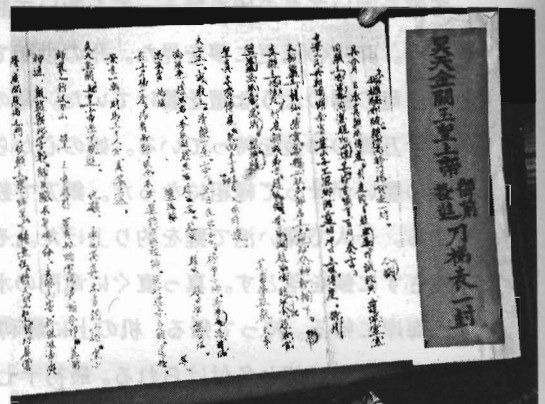
物が実り、さらに盤王は芋麻を植え、織機を作り、芋麻布が作られるようになり、芋麻布の着物を着て太平となったとされる。盤王は、生業神としての性格をもっていることが分かる。

以上テキストからは、盤王の神格は創世神盤古や龍犬槃瓠と同一視することはできない。むしろ盤王は西天福江に生まれ、辰つまり水と結びつけられ、生業にとって重要な役割を果たした祖先神と考へられている。祖先が移動した経路もしくは活躍した土地が、唐王の連州、遊師の行平、五婆の伏雲、盤王の福江、五旗の厨司として伝承されているのではないだろうか。ここでも盤王は神々の中の一神として扱われている。

度戒儀礼で使用される文書の中に現われる盤王を拾い上げてみる。この文書は儀礼の目的、内容、受礼者、祭司等が綴られ儀礼の中で神々に向かって発行され、多くは燃やされ、榜・表・引・疏・據・牒・硃詞等に分類されるものである。文書の中で白榜・刀梯表・加職據(図①②参照)の最初の部分に「祭拜仁恩福主 本部 盤王 龍仙 紫雲 烏鴉 二社 六郎廟王 社令土地神祇祠下奉」とある。儀礼を行なうにあたって当地の重要な廟の神々に儀礼の目的や内容や参加者について報告するのである。最初に盤王の名が見え、文革前までは実際村に盤王廟があったことも確認できた。さらに湖南省の別の地域のテキストのうち藍山県の東北に位置する資興市の宗教職能者の所有するテキストを取り上げる。乾隆四十年の紀年のあるテキスト『大堂歌書』に収められた「盤王起計」部分には稲作や織物にかかわったとされる記述もあり、同じく生業神としての性格も有している。以下に訳文を付す。



図① 白榜



図② 刀梯表

又仰歌曲起

——前略——

- | | |
|---------------|---------------|
| 唐王出世連州廟 | 手把金牌月様園 (双流泪) |
| 出世唐王先出世 | 唐王出世百般齊 (連) |
| 僧家焼香連州廟 | 得見唐王座廟台 (心) |
| 出世唐王先出世 | 信王出世不遮羞 (人) |
| 信王出世●衣着 | 路逢金骨拗遮羞 (人) |
| 出世盤王先出世 | 盤王出世在伏江 (西天) |
| 盤王頭戴平天帽 | 帽帶飛々朝上天 (江) |
| 出世盤王先出世 | 盤王出世在西天 (福江) |
| 盤王出世西天 (伏江) 廟 | 兩個金童在兩辺 (行) |
| 相賭盤王愛相賭 | 釈迦相賭●江河 (辺) |

釈迦賭得三年半	盤王背上出紅花（連）
相賭盤王愛相賭	釈迦相賭在江辺
盤王賭得三年半	釈迦背上出石羅（花）
高王望見紫微鏡	龍兒花紛在洪州（村）
盤王原生一對女	一年四季出行遊（郷）
玉女梳頭不乱法	聖女梳頭不乱飛（系）
玉女梳頭是伏様	随着盤王双下帰（不了時）
——後略——	

「又仰歌曲起」

——前略——

出世する唐王は連州の廟に出世した。手に月のような円い金の札を持っていた。
 出世する唐王は先に出世した。唐王が出世した時には何でも整っていた。
 僧は連州の廟に焼香する。唐王が廟の台に座っているのが見えた。
 出世する唐王は先に出世した。信王は出世した時に体を覆うものがなかった。
 信王は出世する時に着物がなかった。道で金骨に会って、それを折って体を覆った。
 出世の盤王は先に出世した。盤王は伏江で出世した。
 盤王は頭に平天帽を被り、帽子の紐が天に向かって漂っていた。
 出世の盤王は先に出世した。盤王は西天に出世した。
 盤王は西天の廟に出世した。二人の金童が両脇に仕える。
 賭け事好きの盤王は賭け事が好きだ。釈迦と川辺で賭けをした。
 釈迦は三年半ほど賭けをした。盤王は背中に赤い花が咲いた。
 賭けが好きな盤王は賭けを好む。釈迦と川辺で賭けをした。
 盤王は三年半ほど賭けをした。釈迦の背中に石の花が咲いた。
 高王は紫微鏡を見た。竜の花が洪州で盛んに咲いた。
 盤王はもともと二人の娘を育てた。一年四季に外に出て遊ぶ。
 玉女は髪が乱れないように髪を梳かす。聖女が梳かした髪は乱れない。
 玉女の梳かした髪はとても綺麗だ。盤王について帰る。

——後略——

仰盤王歌曲起

起計盤王先起計	盤王起計立春明（煙）
黄雷又共五雷熟	專望●流轉一声（守到春間来認親）
起計盤王先起計	盤王起計立春明（深）
鯉魚水底偷歡喜	專望春雷轉一声（名）
起計盤王先起計	盤王起計抖梨頭（耙）
抖得梨耙也未便	屋下大唐谷報牙（生）
起計盤王先起計	盤王起計梨頭耕（耙）
鼠王過海偷禾種	龍王含水吩禾花（●）
起計盤王先起計	盤王起計立春名（耕）

立得春名（哀）也未便	屋下秧児段々齊（青）
起計盤王先起計	盤王起計種苧麻（支）
種得苧麻児孫續	児孫世代綉羅花（衣）
起計盤王先起計	初發油麻葉代求（花）
苧麻績細變成苧	蕉麻（葉）績細變成羅（見）
起計盤王先起計	盤王起計抖高机（加）
抖得高机（加）織細布	布面又雕楊柳花（系）
着苧盤王先着苧	着焦盤（唐）王先着焦（羅）
盤王着苧世也好	唐王着焦（羅）更嚙呀（聰明）

——後略——

「仰盤王歌曲起」

事を企て盤王は早く行なう。盤王は立春の明るい時期に事を企てる。
黄雷は五雷と親しい間柄だ。一度雷鳴が轟く。
事を企て盤王は早く行なう。盤王は立春の明るい時期に事を企てる。
鯉は水底で密かに嬉しがる。雷鳴が轟くのを待つ。
事を企て盤王は早く行なう。盤王は事を企て犁を使い始める。
犁を使い始めると、家の地面に粟が芽を出した。
事を企て盤王は早く行なう。盤王は事を企てた後に犁で土地を耕す。
鼠王は海を渡って稲の種を盗む。竜王は水を含んで苗に吹き掛ける。
事を企て盤王は早く行なう。盤王は春田を耕す頃に事を企てる。
立春になる頃、また早いのが、家の苗は一面青くなった。
事を企て盤王は早く行なう。盤王は事を企てた後に苧麻を植えた。
息子や孫は植えた苧麻で機を織る。息子や孫は代々苧麻の着物を作り、刺繍をする。
事を企て盤王は早く計画を実行に移す。初めて生え出た油麻の葉が花の代わりに出てくる。
細い苧麻は苧麻の布となり、細い蕉麻は薄絹のような布となった。
事を企て盤王は早く計画を実行に移す。
盤王は計画を実行に移す時に高機を使った。高機で細い布を織って布の表に柳の模様を施した。
苧麻の布を着る盤王は先に苧麻の布を着る。蕉の布を着る唐王は先に蕉の布を着る。
盤王が苧の布を着ると、世の中はよくなる。唐王が蕉の布を着るとさらに賢くなる。
——後略——

その他の地域の伝承を記した、湖南省江華瑶族自治州で収集された乾隆年間の写本を整理した『盤王大歌』、広西チワン族自治区の賀県で収集された『盤王大歌』、一九六〇年代に広西チワン族自治区大瑤山瑤族自治州三角公社で収集された『盤王歌』等のテキストには、断片的ながら船を造り渡海したと思われる記述があるものの、やはり龍犬は見えず、一方西天福江に生まれ生業にかかわるとされる盤王に関する内容は、盤王出世・盤王献計・大盤計・盤王起計と題された部分に見える。また採集地は不明だがドイツバイエルン州立図書館所蔵ヤオ族写本からも同様の内容を確認できた。危機にあたって守護してくれた族祖（槃瓠）との契約によって祭祀の場が設けられ、感謝が歌によって表わされているというより、西天福江の地に結びつけられ生業神としての神格を与えられ祖先神の一人とし

て祀られている盤王といえる。

以上複数の地域のヤオ族の祭祀で使用されるテキスト・文書を検討したが、ヤオ族にとって盤王とは、創世神話の盤古と龍犬槃瓠に加え、生まれ地を西天福江とする生業との結びつきの強い祖先神盤王が存在することだけは確かであろう。複数の伝承が重層して存在することが確認でき、混同されたり分離されたりしながら、祭祀の場に矛盾なく存在しているのである。西天福江は盤王の活躍の地であり祖先の長い旅の一経過地であったといえる。

注

一 この説明は宗教職能者だけではなく、宗教文献や研究書でも行なわれている。

二 広西・湖南の過山瑤が行なう、還盤王恩で歌われる『盤王大歌』は七言を主とし三十六段または三十二段、または二十四段または十八段から構成され、さらに七任曲と称される曲調を異にする七つの歌を加えて成立するとされる。湖南省江華瑤族自治州で収集された乾隆年間の手抄本を整理した『盤王大歌』（中国少数民族古籍瑤族古籍之一湖南少数民族古籍辦公室主編 岳麓書社 一九八七年）は内容が充実していると考えられるが、起声唱・日出早・日正中・日斜斜・種竹木・唐王出世・盤王出世・盤王献計・流羅子・琵琶頭・石崇富貴・歌一段・魯班造寺・梅花曲・雷落地・郎老了・彭祖歌・夜深深・大小星・月亮亮・黄条沙・天大早・天地動・天地暗・北邊暗・見大怪・相逢賢曲・造天地・万段曲・送神去・亞六曲・荷葉杯曲・桃源洞歌・四字歌・放猎狗・夜黄昏・何物歌・盤州歌・南花子曲・閩山歌・梁山伯・鄧古歌・飛江南曲から構成されている。

広西チワン族自治区の賀県で収集された『盤王大歌』（中国少数民族音楽古籍叢書之一盤承乾等收集整理 天津古籍出版社 一九九三年）は、起声唱・輪娘唱・日出早・日正中・日斜斜・日落江・黄昏歌・夜深深・大星上・月亮亮・黄条沙・天大早・見大怪・北邊暗・雷落地・葫蘆曉・洪水尽・為婚了・三逢延曲・造天地・種竹木・三更深曲・盤王出世・盤王起計・富貴竜・荷葉杯曲・梁山伯歌・南花曲・桃源洞・閩山学堂歌・造寺歌・飛江南曲・何物歌・彭祖歌・梅花曲・亞六曲で構成されている。

一九六〇年代に広西チワン族自治区大瑤山瑤族自治州三角公社で収集された『盤王歌』（広西民族学院中文系民族民間文学教研究翻印一九八〇年）は、起声唱・初入席・隔席唱・論娘唱・日出早・日正中・日斜斜・日落紅・日落西・夜黄昏・夜深深・天上星・月亮亮・天大早・見大怪・天地動・天暗烏・北邊暗・雷落地・伏羲姊妹・葫蘆・洪水発・洪水天・造天地・烏雲生・大盤計・小盤計・桃源・閩山学堂・魯班造寺・何物・鄧古・彭祖・郎老了・放猎狗・歌船・第一黄条沙・第二三峯寒・第三曉段曲・第四荷葉盃・第五南花子・第六飛江南・第七梅花で構成されている。張勁松によれば本事例と同県藍山県桐村の『盤王大歌』は、第一章は日出早・日正中・日斜斜・日落西・日落崗・夜黄昏・夜深深・天上星・大星上・月亮亮の他、第一曲黄条沙を加えて構成され、第二章は、天大早・見大怪・天地動・天柱倒・天暗烏・北邊暗・雷落地・洪水発・洪水尽・怕不合・為婚了の他、第二曲三逢閑を加えて構成され、第三章は、造得天・造得地・造得火・置山源・置青山・相説報・唐王出世・盤王起計・邀娘壳・白涼扇・富貴竜・琵琶竜・嚶羅真の他、第三曲万段曲を加えて構成され、第四章は、賜嫁早・劉岭大・烏雲生・梁山伯・大州大の他、第四曲荷葉杯を加えて構成され、第五章は、桃源峯・閩山鳥・閩山青・入連洞・会造寺天字大・鄧鼓歌の他、第五曲南花子を加えて構成され、第六章は、何物変・得郎变・何物輪・何物爛・何物死・彭祖生・彭祖死・郎老了の他、第六曲飛江南を加えて構成され、第七章は、木倒地・船成了・船到水・送路去・歸去也・飲酒了・不唱了の他、第七曲梅花相送を加えて構成されるとしている。（張勁松『藍山県瑤族伝統文化田野調査』岳麓書社 二〇〇二年 六三～六五頁）

資興市の宗教職能者所有の乾隆四十二年の銘がある手抄本の『大堂書』には、起掣唱・論娘唱・〇入席・隔席唱・分〇唱・平平唱・日頭出・月正中・月斜斜・月落西・月落江・日頭過江・夜深蘭・夜深深・夜黄昏・黄昏・月亮・第一紅系紗曲・一片鳥・二十八後・第二圍歌曲・天太早・見怪歌・見怪路・見大怪・天柱倒・天暗烏・北邊暗・洪水発・雷落地・葫蘆歌・大州出・葫蘆熟・洪水発・洪水浸・為婚了・第二圍三逢閑曲・造得地・造得天・置天地・仰歌曲・深山竹木・唐王出世・信王出世・盤王出世・白涼扇・坦傘・盤王歌曲・盤王起計・石崇富貴・琵琶・魯班・嚶囉・第三圍滿段曲・出嫁早・秀才・師人・十二遊師・烏雲上・大州・英台・梁山・大紅・第四段荷葉歌曲・桃源・閩山・起造歌曲・造寺魯班・鄧古歌・遭小何物歌・第五段南花曲・唱何物歌・唱古人歌・郎老了・唱彭祖歌・唱第六段飛江南曲・唱送聖歌・缸成了・缸到水・送神去・第七段鴨六曲が並べられている。（〇は不明）

さらにドイツバイエルン州立図書館に収められたヤオ族のテキストにも同様の構成をもつものを複数確認できた。『盤王大歌』の構成及び内容について詳しく分析が試みられているものに黄海・邢淑芳『盤王大歌——瑤族图腾信仰与祭祀經典研究』（貴州民族宗教文化研究叢書 貴州人民出版社 二〇〇六年）、鄭長天『瑤族坐歌堂的結構与功能——湖南盤瑤剛介活動研究一』（瑤学叢書 民族出版社 二〇〇九年）がある。

三 「又接三廟王」 参考『家持の春巡行とやまの音』を参考に筆者作成（試案）

出世唐王先出世	唐王出世在連州
唐王出世連州廟	香煙裡内聴歌頭
聞説今朝有相請	齊々正々降香壇
出世遊師先出世	遊師出世在行平
遊師出世行平廟	香烟裡内聴歌声
聞説今朝有相請	齊々正々降香壇
出世五婆（伏靈）先出世	五婆出世在伏靈
五婆出世伏靈廟	香烟裡内聴歌声
聞説今朝有相請	齊々正々降香壇
出世盤王先出世	盤王出世在福江
盤王出世福江廟	香烟裡内聴歌堂
聞説今朝有相請	齊々正々降香壇
出世五旗先出世	五旗出世厨司
五厨出世厨司廟	香烟裡内聴歌其
聞説今朝有相請	齊々正々降香壇

唐王がまず生まれる	唐王は連州に生まれる
唐王は連州廟に生まれ	香の煙が立ちこめ歌が聞こえる
今朝招請があり	整然と祭壇に降臨する
遊師がまず生まれ	遊師は行平に生まれる
遊師は行平廟に生まれ	香の煙が立ちこめ歌が聞こえる
今朝招請があり	整然と祭壇に降臨する
五婆伏靈がまず生まれ	五婆は伏靈に生まれる
五婆は伏靈廟に生まれ	香の煙が立ちこめ歌が聞こえる
今朝招請があり	整然と祭壇に降臨する
盤王がまず生まれ	盤王は福江に生まれる
盤王は福江廟に生まれ	香の煙が立ちこめ歌が聞こえる
今朝招請があり	整然と祭壇に降臨する
五旗がまず生まれ	五旗は厨司に生まれる
五旗は厨司廟に生まれ	香の煙が立ちこめ歌が聞こえる
今朝招請があり	整然と祭壇に降臨する

盤王は唐王・遊師・五婆・五旗と共に廟王として並び、唐王は連州、遊師は行平、五婆は伏靈、五旗は厨司、盤王は福江にそれぞれ地名と結びつけられている。